

# ごく普通の一般男子た ちの異世界冒険論

クラウンフィールド・ソベルバレン  
タイン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ごく普通の男子高校生たちがいろいろするお話。

※この作品は小説家になろう様、アルファポリス様でも掲載しております。

# 目次

天才の死	1
プロローグ	4
混沌としたカオス	7
カオスの先にあるもの	16
未開の世界	21
王の	26
迷い	29
アンドロイドメイド「ロイド」	33
桜柳邸の日常	37
メイドとの出会い	42
ミツマタの能力	45
アンドロイドを作ろう	50

始まりの始まり	53
玉座奪還	59
桜柳帝の普段	64
五感とメイド	68
自転車とメイド	74
ルーフ・ベルファの逆襲	79
ゼロからの再出発	86
王の隠れ家	92
告白	96
披露宴パーティー	100
殺意	104
ルーフ・ベルファの終演	113
前日の夜の悪夢	119

アンドロイドメイドは桜柳咲蘭の夢を見

るか | 122

ルームの本心 | 127

ルームの秘めた心 | 130

メイド・ウイズ・メイド喫茶 | 134

ルームとのデート 誰も忍び寄らない

139

隠れ家のメイドたち | 143

お土産 | 147

砂糖マシマシませそば | 151

D E | 155

星空 | 159

先輩の事は信頼していますが、上段に

上ったら蹴落としますよ | 163

王座奪還前夜祭 | 168

永遠の日々 | 175

最終章のカタストロフィーな結末を迎え

た終演 | 186

# 天才の死

桜が散っている。まるで花びらがひらひらと舞っているみたいだ。しかし散った桜を踏む男子が二人いて、情緒を分らない男子二人を俺はため息をつく。

そんな俺の名は桜柳咲蘭。普通の男子高校生だ。成績は全国模試で2位。髪の色は茶色で自分でも鼻が高いと思う。イギリス人と日本人の間に生まれた父とただの日本人の母と間に生まれた、それが俺だ。だからあまり自分では興味ないが、どうやら、俺は、いわゆる、イケメンという部類の男子らしい。まあそんなことはどうでもいいのだが。

女子1「ねえ桜柳くん。勉強教えてー」

女子2「桜柳君は私と勉強することになってるの。横入りはしてはダメじゃないかしらと思うのだけれど」

女子3「あの…桜柳くん。…ほくと、勉強しよ…?」

女子4「桜柳! 私と勉強しなさいよ。でも勘違いしないでよね! 別にアンタのことは好きじゃないんだから!」

女子13「ワタシと、ベンキョーしてくださいサーイ！」

俺は目立ちたくないが、こうして女子たちが集まってくる。何故かは知らないが。俺は一匹狼なので、何故俺の周りに女子が集まってくるのか知りたいたので、友達がいないので、理由がわからない。だから俺はいつも俺の周りに集まってくる女子を優しく断る。

すると女子は黄色い声を出して失神した。よく分からないが、最近の女子はよく失神するのだ。俺は冷静にそれを無視して、教室を出る。回りの男子は嫉妬した目で俺を見る。何故かは理解できない。しかし俺はそれを冷静に無視して、教室を出る。すると担任の教師が俺の歩みを止めた。

担任の教師「おい！ これはお前がやったんだな!? 鍛えてやる！」

そう言って殴りかかってくる。しかし俺はハワイで合気道を習っていたのでそれと交わして殴り返した。すると担任の教師がズシンと地鳴りを起こして倒れた。

俺はこの件を校長先生に話した。すると校長先生は

校長「その教師は退学だ」

俺は俺が退学にならなかつたことに温度しつつ、ため息をつく。この世界は俺の知ら

ないことで満ち溢れている。それを見つけることで世界を解明する事が俺の使命である。今日は高校の入学式だった。

しかし、唐突にそれは起きた。

公園で銀髪でショートヘアで、鼻が高く、顔立ちの整っている美しい美少女が醜悪極まり無いこの世の塵をかき集めたような顔立ちの不細工な男に襲われていた。俺には関係ない話なので無視しようと思ったが、女子がこちらを見て助けを求めたので、仕方なく助けるために走った。

しかし、そこでトラックがこちらに向かってきた。このままでは女子がトラックに離れて死んでしまう事が明瞭で明らかだった。俺は銀髪のリボンをつけた美少女を助ける為に走る。銀髪で短いスカートをつけた少女を庇ったら、俺は崖へと落ちていった。

そして俺は海の藻屑となった…

## プロローグ

心が破裂しそうで破けそうになる。

朝の声が枕元で鳴り響いた。

君の声か枕元で反響して響いた。

俺は目が覚めたので、大きく背伸びをしながら口を大きく開けて大きなあくびをしながらご飯を食べる。食べたのは魚の焼き魚と暖かい味噌汁とキュウリの漬け物と茄子の漬け物と新潟県魚沼市産のあきたこまち。食べ終わった俺はブレザーを着て歯磨き粉の付いている歯ブラシを加えながら服を着ながら歯磨きをした。

彼女の声が響いた。

そして学校についた。俺は席について本を読み始めると、授業が始まった。そして彼女の声が響いた。

「ベルファア君、あなたさっき私のことを無視したわね？」

俺はそれを冷静に無視して本を読む。本を読んでいると声が響いて着たが冷静に本気で無視して授業を受けた。

「おい、ベルファア！ これは彼の天才数学者アイザック乳トンでもわからなかった数



学の問題だ！解いてみる！」

「……こんな簡単な問題が分からないわけないだろう」

俺はペンを持ち授業内容を書きながら無視した。

「私のこと無視しないでよ、ベルファ君！」

そうこうしているうちに一日が終わった。学校が終わったので改札口を目指しながら電車に乗った。



俺の名前はルーフ・ベルファ、俺の将来の夢は突如として行方不明になった俺の親友桜柳咲蘭の搜索である。俺は学校でも桜柳咲蘭探している。探していたが声が響いて着たので中断した。

だがそれも今日で最後だ。

俺は背中を振り返り、声を響かせる。だが声は虚しく響いていくが反応がなかった。

「……無視は頂けないな、お嬢さん？」

そこにいたのは彼女の姿。

「と……ころであるの数学の問題はとけたのかね？」

突然現れたのは初老の男性。いや、彼女が初老の男性になったのだ。そして消えて行つた。

「……まさかあいつが、な」

虚しく響いた俺の声は誰もいない街に響いていった。夜の帳が落ちた街を歩いていると、世界が優しさを包み込まれるような錯覚に陥つた。

そして俺はこれから自分がどうなるのかを知る。夜の帳に光が差し込む。否、それは光ではなく強大な腕だった。勢いよく迫ってくるも強く握りしめられた。目の前が真つ白になり意識が途切れる。

(ちく、しよう……)

途切れる瞬間の意識は混濁し、明瞭ではない。混濁する意識の中にか耳に聞こえてくる。

(さあ、これはあなたの物語、これから始まるのです)

優しげでどこかおぼろげで冷たいような感触もあつて、結局のところどこか落ち着くような声。そして本当に目を閉じた。

## 混沌としたカオス

目を覚ますと、青空が眼下に広がっていた。

「うわあ。まるで、ブルーハワイのかき氷の世界に来ているようだ。たまげたなあ。さつきまで夜のとばりだったのに。」

そして海の藻屑となった：

身に着けていたスマートフォンが。

合唱を演奏し始めた。頭に響いてくる。カモメのような大きな鳥たちの大きな響く合唱が。

——————  
 ラララ ララララ ズインゲン ズインゲン ヴリンダーズ  
 ララ ラララ ズインゲン ズインゲン ヴリンダーズ ララ

その曲のリズムを聞いて思い出す。彼女がよく歌っていた歌を。そう、それは某アニメのオープニングテーマであつた気がするがよく覚えていない、それもそのはず、自分がこの曲を聞いたのは幼稚園の頃なので、記憶があいまいなので、彼女が歌っていたという記憶のほうが強が残っていたのだ。思い出していると体に重い衝撃が走り出す。青空だと思っていたのは青い海面だったのだ。

「あなた、こんなところで何をやっているんですか、ついに頭までおかしくなつてしまつたんですか、仕方ないですね、あれ？もしかして私のことを見て赤面しているんですか」

上半身が人間の形をした女のようなナニカが目の前で泳いでる。これもまた彼女なのだろうか。声だけは彼女と同じだ。声の主に向かって手を伸ばす。しかしその手は空気を斬った。

「ご主人様あ、なんですかこの人間のようなものは、私に触れようとしてきましたよ」  
こえの主の後ろからこえの主が現れる。

二人の人物に見えたそれは、実は1つの胴体から伸びていた。こんな、混沌としたカオスのような生物を見たのは初めてであった。

うろたえた俺の頭は一瞬で即座に落ち着いて冷静を取り戻す。

「お前は……お前たちは一体なんなんだ？」

「ベルファさん、私のことを忘れてしまったんですか、残念ですね」

俺はその声に覚えがない。おそらく片方の頭は彼女と同じ声で、もう片方の頭が見知らぬ人物だということに決まっている。

「そう、私たちは海の藻屑になった後このような体を手に入れました、どちらももとは桜柳でしたがあの事件からこのようになってしまったのです、声が変わったほうがかもともとの桜柳です」

「桜蘭を語る化け物め！」

確かに俺のスマートフォンが桜柳という銘がつけられていたが、スマートフォンがこんな風になるわけがない。

「あなたの記憶を書き換えたので、私桜柳は美少女キャラクターということになりましたが、うまくいかなかったみたいだな、ばれてしまったからには仕方ない」

すると前方の前にいた化け物の形が崩れていく。2つの頭はきちんとした1つの頭

になり、下半身も人の形をとり始めた。その姿はまるで最後に見た俺の親友桜柳咲蘭に間違いない。

「さく、桜蘭なのか桜蘭」

目の前の光景が意味がわからなくて頭のなかが錯乱して意味不明になる。

「まあそんな顔しないでくれよ」

「これが信用できるとでも思っているのか！」

「まさか信用できないのか？」

「おっ、そうだよ」

混乱する自分の頭を落ち着かせようとする。足のばた足の音がよく響いた。



「おれは、お前が、俺に何か言おうとしたのをわかっていたからお前のことを探していたんだぞ」

「行方が消えてどこにいるのかわからなくなったやつがなにを言っている！」

突然大きな波が俺たちに波打ってきた。

「行方が分からなくなったのはお前、桜柳のほうだろ！　っとうわ、なんだこの高波はまさか：：お前何をするつもりなんだ？：：よくもおれの今までの苦勞を打ち消そうとする気だな！」

そうして俺は波に流されて高波に吞まれ流されて行く。やつを置き去りにして俺はその場から流されていった。

意識が飛んでいき、周りが真っ黒になってしばらくしたのち、ガタゴトと列車が走行している音が聞こえてきて、置き去りになっていたはずの桜柳が旧型客車のボックスシートの方かいの席に座っていた。

「ここは、この場所は一体どこの場所なんだ？」

「ここはお前の精神世界だ」

「銀河鉄道の夜に出てくるような列車の中が俺の精神世界って、どういう意味なんだよお」

「電車に揺られながら桜蘭を見つめる。桜蘭はまばたきを数回すると、窓のそとを眺めた。」

「最初は青空だと思ったら、いきなり海の中に入り、今度は満天の星空の中を列車で走っているとは、なんとという混沌としたカオスな状況なんだよ。俺は理解できねえよもう」

窓に手をつけながら外を見回す。溢れ出す光の粒が俺の頭を占領した。

「俺の脳内のキャッシュメモリはパンクしそうだよ。桜柳、お前は俺に何をしたいんだ？」

答えようとする口は開かず視界がぼやけてくる。答えようとする口が少しだけ開いたのを尻目に俺は意識を闇に落ちた。

「ご購入ありがとうございます、間もなく終点です。お忘れ物ございませんようお気を付けてください」

そして光に包まれる。

## カオスの先にあるもの

「桜柳、俺を列車でここまで連れてきて何をするつもりなんだ？ 個人的に旧型客車に乗れたことはうれしかったんだけどさ。まあ、こんな宇宙の果てに来ちまったよ。やれやれ、お前は何を考えているのかさっぱりわからん」

俺は思考をもはや諦めかけていた。俺の親友が実は『彼女』で、おじさんで、ここは俺の精神世界だとか宣ったり、本当に訳が分からない。

「一体これからどうすればいいんだよ」

呟いた独り言に答える声はない。静寂に包まれてしばらくしたのち、足音が聞こえてきたので、足音のほうに歩いてみた。

「思い出とは無価値なモノ、しかし、その在り方はいかようにも変化する。ここは君の精神世界。故に明白。君はいないはずの『彼女』をカンパネルラに当て嵌めている。これは君の思考、そうありたいと思った一つの理想。まあ、『彼女』の生存に関して、君の理想とズレはあるかもしれないがね。」

向かった先にいたのは、いつの日か見た初老の男性。

「お前は数学のじいさん……」

「まあ君にはそう見えるのだろうな」

「まあ忘れるはずはないさ、お前の特徴的な髪形は忘れられない。そんなことはさておき間もなく終点って言うてからなんで15分以上も走り続けているんだ？」

「相変わらず口のきき方がなっていないな、君は。言ったはずだろう、ここは君の精神世界だと。まあこれ以上君にヒントを与えるつもりはない。せいぜい頑張りたまえ」

「なるほど」

俺は頷き納得してじいさんをみて考える。つまりはそういうことか。

機関車のドラフト音は次第に大きさを増していった。

「どうやら理解したようだな。さすが、私の見込んだ男だ」

「……つまりはこういうことだろ——」

そう言おうとした瞬間視界が真っ白になり、意識が飛ぶ。意識をなくす直前に見えたのは、少し笑みを浮かべてこちらを見る老人の笑顔が見えた。

★

ブレーキで列車が停車すると同時に俺は意識が戻ったが、車窓を見てみるとそこには桜柳がよく訪れていた公園の目の前であった。

「懐かしいな……。なあ、いるんだろう。咲蘭」

不意に後方から聴いた事がない声が唐突に耳に侵入してくる

「『『『『なあ、咲蘭』』』』」

「ちよつとまつて、ちよつとまつて、俺は桜柳でも咲蘭でもないぞ。中学のころから小説を書くことを趣味としていて、LINEグループで小説を投稿しあつたりしてかっつ、数学もできる天才ルーフ・ベルファだぞ。なんだつて俺が桜蘭なんて呼ばれないといけないんだ。もう俺は頭がおかしくなつてしまふ。簡単じゃねえよ。平常心を保つ」

しかし、簡単でないことを成し遂げるのがこの俺、ルーフ・ベルファだ。

「ああ、なんだよ、そういう事がよこんな事にも気がつかなかつたのかよ俺はよ」

懐に入っている銃を取り出す。銃を取り出した瞬間、一人の少女が声をかけてきた。

「ああ、分かつているさ。数学のじいさんは言つていた。思い出は無価値でも、精神世界ならその在り方は変化する。ならこの少女は無視すべきだ。今、この瞬間、俺が向き合うべき相手は——っ!!」

「あのー無視しないでいただきたいのですが」

気が付くと彼女はキスでもできそうな距離にまで来ていて、俺は一步後ずさりして顔を赤くする。

「何ボーツとしてるんですか、こんなところにいたら流れ弾が当たりますよ」

「俺に流れ弾が当たることを心配してくれてるのかい？ただ、俺にはその優しさを受け

取る資格はないんだ……なぜならね……」

——俺は、桜柳がすきだから。

そう、俺は桜蘭に告白するためはずっと桜柳を捜索し続けていたのだ。

だが、もうわかつている。

「べ、べつに、一人じゃなくてもいいよなあ。うんそうだとも。好きな人は何人いたっていいじゃないか。そうだよそうだよ。」

咲蘭はずっと俺の中にいたんだ、もはや俺と咲蘭は二人で一人なのだ、だったら……

これは浮気にならない!!!

だから俺はこの少女の舌にキスをした。

だがこの女は俺のキスを拒んでさらに頬を殴ってきた。

「なにやってるんですか。あなたは鏡を見たことがあるんですか?そもそもそんな顔で生きていて聴ずかしくないんですか?」

彼女の視線は冷たく、公園の空気が凍りついていくのがよくわかった。

「この世界は俺の妄想なんだよ!!!!!!だから何をやっても捕まらない!!!!!!」  
ハ—————!!!!!!

そうして俺は俺の思いつく限りの欲望と羨望を行使して、思いつきり気持ちよくなつた。

その行為を目にした女は俺に向かって殴りかかってくるが俺はその拳を避けて受け流して後ろに回った。

そうして世界は廻っていく。

「ルーフ・ベルファ。そうか、つまり君はそういう奴だったんだな。お前は俺を愛していると思ったのだがやはり、あのような性格の女が好みだったんだな。最初なぜ俺があのようなキャラクターになったのかをわかっていなかったというのが残念でならないよ。」

「小学生は……最高だったぜ……（完）」



## 未開の世界

「……あなたは精神世界に連れてきたという話は覚えていますか？」

少女は俺を見つめながら言う。

「ああ脳裏に焼き付いてるよ」

少女から白い光が発光したが特に何も起こらない。

「あなたがこれ以上ここに続けるとおあなたの魂は現実世界に戻れなくなってしまうのです」

「なっ、うっ嘘だろ！」

少女の突然による発言に俺の心は驚きのたうちまわる。

「戻るには一体どうするべきなんだよ!!」

「そうですねえ…戻る方法はあることにはあるのですが…」

戻る方法があると聞いて俺は安堵の息を吐き出す。

「じゃあ、とつとつ、その方法をはやくしてくれよ！」

「あんまりオススメはできないんですけどねえ」

「構わないとつとつとやってくれ」

「じゃあ、死んでもらいます」

「はあ?」体何を…」

そのように言おうとするその刹那、少女の姿が消え去りお腹に痛みを感じる。

少女の腕は俺の身体を貫き、とれる。

「がっ、一体何を…ゴフツウ」

言葉を紡ぐごとくとする口からは言葉ではなく血が出てくる。

「いったでしょう。オススメはすることはできないと。少し苦しみが纏わりつくでしょうけど、まあこれで帰還することができませう」

俺の血が少女の顔面に飛び散る付いているなか、笑顔で言ってくる。

「ぐっ、はあはあ」

大量による出血により視界が点滅してフラフラする。

「ああ、そうそうこの精神世界で起こったことは全て忘れます。目が醒めると多分違う世界にいると思うので頑張ってください。あと、その世界には桜柳さんがいるので頑張ってください」

俺は体力の限界が底をつき意識を失う…

\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$\$

目が醒める…

視界に光が差し込む

鳥の鳴き声が響く

流れる海から波の音が大きく聞こえる。

「うう、うう、」

うめき声を出しながら大きく目を見開く。

青い広大な空に純白の雲とあと太陽がうかんでいる。

体を立たせる。

「たしか俺は海の高波に飲まれて、そしてなんかあつたような気がするのだが全く思い出せない」

ふとあたりを見渡す。

見たことがない木が生い茂っている。

その中俺は木々の中の生物の気配を察知する。

しかもそれも大量に囲まれていることが理解できた。

「ざっと、20〜30つてどこか。襲いかかってきたらたかかわなくてわな」

そのように言っていると木々の間から猿のような見たことがない生物が現れ出現する。

「キシヤーー！」

一匹の咆哮を機に潜伏し機会をうかがっていた生物共々襲いかかってくる。

「はあ、仕方ない、上下関係ってやつを思い知らせてやるしかないな」

俺は半身を落とし構え走る。

その一帯はしばらく生物の鳴き声で埋め尽くされた。

「まったく、大して強くもないくせに数だけ多いな」

そう言いながら俺は生物の倒れている大地を見ながら眩く。

「だが、見たことのないやつだな。各国の生物図鑑を完読してる俺でもみたことがないな、そして見たことがない植生、そして見たことがない大地、そして見たことがない生物……本当に異世界に来てしまったようだな」

流れる海を見る。

「海の波に飲まれる前……確かに桜蘭とあった。桜蘭は必ずこの異世界にいるはずだ！」

俺はそう決意する。

「さてこれからどうするか、異世界だから何をすればいいのかわからん」

果たして桜蘭を見つけることができるのだろうか……

## 王の

みんな、お久しぶり。

長らくみなさんをお待たせして申し訳ない。私がこの物語の主人公桜柳咲蘭。見ての通りこの世界では考えられないほどのイケメンだ。

なぜ1話以降俺メインの話がなかったって？

そんなことは簡単だ。俺が毎回主人公で出演してしまうとどうしようもないクズ人間、そう、ベルファくんのである幕がなくなってしまうからだ。

さて、今回はどうにも素晴らしい俺のことを紹介して差し上げよう。

まずは、絶世のイケメンである私桜柳咲蘭の紹介だ。

第1話「天才の死」にあるとおり、私の周りにはなぜか女子が集まってくる。勿論それは私の能力、といった類のものではない。ここでわざわざ言及しなくても分かることだろう。

さて、私は美少女を助けた後海の藻屑となったとされていた。しかしながら実際はこうだ。俺は崖へ落ちた際、平行世界の王となった。平行世界と現実世界は同じように見

えて違う場所だ。建物や植物の配置は現実世界と基本的に同じようにできています。しかし、その世界を破壊しようと改善しようと俺の思うままになる。だが、俺は知り合いない状況で非常に寂しかったので、俺の知り合いであるベルファをこっちの世界に連れて行ってやった。

ベルファをこっちの世界に連れて行く前に、あいつがどういう人なのかを知りたかったので、ハニートラップを仕掛け性格を調べたので性格を知ることができたんです。

さて、もつと俺のことを知りたいだろうが今回は時間の関係で俺のことはこの辺までしておく。

次はベルファの説明だ。

そうだな、彼は俺のことを探していた。そう、一言で表せばクズだ。

次に、私の使用人の紹介をしよう。

現実世界にいた頃に集まってくる女子は、いきなり失神したりして使い物にならない奴らばかりだった。だが、こっちの世界にはこのイケメンの俺にふさしん女子がたくさんいたから、俺に慕ってくれると言ったので使用人にすることにした。やれやれ、使用人にして欲しいと頼まれるなんて俺にしては朝飯前だ。

「おい、出てきてくれるかな。」

「「かしこまりました、ご主人様。」」

三人の使用人が同時に話した。

その寸分の狂いのなさはぴったりだ。

「それでは紹介してくれ」

使用人1「使用人の、ペンシルです。ベルファの性格を探るためにご主人様のお手伝いをいたしました。」

使用人2「使用人の、ロイドです。」

使用人3「使用人の、ルームです。」

三人とも俺の屋敷にいるときは、正当なメイド服を着用している。

ペンシルは、黒髪。ロイドは緑。ルームは紫だ。

この三人は、俺の身の回りの世話をすることは勿論のこと、ベルファの世界で起こさせている出来事を手伝ってくれている。

「ベルファの世界」で、疑問に思った君。とても着眼点が優れた目を持っている。

ベルファは平行世界の裏の世界にぶち込んでやった。その世界の表向きは中世ヨーロッパのそうだ、よくある一般的な異世界だ。その異世界でベルファは絶望の崖っぷちに追いやられていくだろう。



## 迷い

桜蘭を探索し始めて小一時間経った。

広い草原に森が生え広がりそこには一本の道があった。

その道をひたすら前に進んでいった。

しかし、一時間歩いてても何も出てきやしない。

「そろそろ街とかがあってもいいと思うんだけどなあ。こんな草原のど真ん中に桜蘭はいるとは思えないし。」

青いキャンパスのように広がる空にある太陽が暖かくする。

しかも一陣の風が通行する。だからだと汗が流れ出る。

「あつい、あつい、あつい。干からびちまいそうだ。ちくしょうあの女、俺をこんなところに連れてこさせやがって。」

「あつい、あつい、あつい、煮干しから梅干しになっちまうよ」

体中の水が体中から水蒸気のように飛び散る。

「まずい…目がフラフラする…」

水が飛び散ることによって体力が消耗し視界が安定しなくなっていく。

「腹も減って来た……何か飲み物と食料を探さないといけない」

そのように森をさまよっているとき水の音が聞こえてくる。

「こつ、これは水！」

どこからともなく溢れ出る体力で疾走し音の現場へ向かって行く。

現場に到着すると小川が流れていた。

「水だ！水だ！水だ！水だ！」

俺は小川に顔面を突入し水がを口からどんどん入れていく。

「ふう、なんとか生き返った、ここに魚とかいけば最高だったんだよ」

腹の音が放たれる。

「とりあえず、食料を探しながら川に沿って行くか。小川だけど飲み水には困らんしな

んかあるかもしれないからな」

そうして川に沿って走行していると、遠くに建物らしき何かが発立されていた。

「あれは、建物……もしかしたら誰かいるかもしれない。」

建物に近づく。

「キヤー！」

中から悲鳴が聞こえてくる。

俺はそれを耳に入れると跳躍する。

跳躍したのち加速度をつけて建物の天井を突き破る。

「なっなんだ!」

突然の侵入に驚く人物、その傍らには人が地に伏せている。

「なんだこいつはいきなり天井突き破って来て!」

「くっ、間に合わなかったか」

地に倒れている人物に目を見開き観察していると、眼前の男が手斧を振りかぶってくる。

「死ねえええええ!」

俺はその振りかぶった手首を掴み横に一回転させ投げ飛ばす。

「うおわわわわわわわわわ!」

投げ飛ばされた男は即立ち上がると逃亡して行く。

「チツ、逃したか」

逃げた男の背中を見たのち倒れている人物に目をみむける。

「遅かったか…」

倒れている人物は女性で斧が刺さった痕跡が見える。

俺はその人の墓を建てる。

そして家の中を物色する。

探しているところの周辺の地図を見つける。

「こんなこと、泥棒と同じことだけど…」

俺は地図と最小限の食料を持ち、出発前に墓に手を合掌し旅立つ。

「このまま行けば街に出るか…とりあえず行ってみるかな…」

そうして森を抜けて行く。

## アンドロイドメイド「ロイド」

「……あつい。頭が沸騰して茹蟄になってしまいそうだ。」

両面に広がる砂漠。

意味不明な動きをするフンコロガシ、そして、大地を震撼させる風、あと空を照らす逆光。

草原のときのほうがまだ快適だった気がする。

地図によるとあと2時間ほど歩かなければ街にはたどり着かないらしい。

「基本的にごつちの世界は暑いなーまったく。さっきの森で水を含んどけばよかった。」

周囲には人間はおろか生物すらいやしない。

……と、思っていた矢先、前から漆黒の影をまとったよくわからないようなものが近づいてくる。

「なんだあれは」

よく見ると影の中からメイド服のようなものが発見できる。

漆黒の影はまっすぐと直進し、その動きは不気味な速度で疾走するがごとく近づいてくる。

そして自分の目の前に現れた。

「あなたは、ルーフ・ベルファ様ですね。」

緑髪のメイドは淡泊とした声で話しかけた。

目が髪で隠れていて表情がよく読み取れない。でも、もしかして、ひよつとしたら、結構美人かもしれないぞ。

「ああ。」

「ご主人様……桜柳咲蘭様の第二使用人のロイドです。ルーフ・ベルファ様をご案内しにまいりました。」

桜柳の使用人だと。しかも第二？すごい身分になったんだなあ桜柳も。

使用人ってことはつまりメイドってことか。

桜柳のやつ、こんな美人をメイドにしやがって。

いっそのこと俺のメイドにしてやりたいものだ。

まあ、桜柳がこの世界にいるということが確信に変わった。

「しかし、タダとは言いません。あなたがこの世界で犯した罪は大きいですから。」

「……は？」

「ベーシック・インプット・アウトプット・システム起動、バトルオペレーティングシステム、空間制御ドライバー、読み込み完了。シユバルツダークマター!!」

メイドが叫んだその瞬間周囲は真<sup>ダ</sup>っ黒な暗黒<sup>ク</sup>な漆黒、あと黒<sup>タ</sup>い太陽に包まれた。  
「なんなんだこれは!!!」

周囲を化け物のよう<sup>!</sup>なものに囲まれる。

それはまるで、カオスと混沌が混ざり合ったような物体だ。

周囲をかこむ化け物は、いきなり空を舞いあがった。

そして、暗黒な漆黒へ青白い光を降り注ぎ始めた。

それはまるでブルーハワイのかき氷をライトで照らして宙を舞っているようであった。つまり、花火みたいな感じだ。

「……許せない、ペンシルをあんな風に扱って!!!」

先ほどの周囲をかこむ化け物が爆音を放ったのち、メイドは怒り狂った表情で俺を睨み付ける。

「は？ペンシルって誰だよ!」

なんなんだ、なんなんだ、なんなんだ!全く理解できんよ!

ペンシルってペンのことか?筆記用具に何かをしたというのか?

「あそこまでのことをしておいて忘れたのかあああああああああああああああ  
!」

どうにも理解できない。何が起きたんだ。

「あそこまでつて。俺が一体何をしたつていうんだよ！」

「そうですか。覚えていないんですか。わかりました。」

するとメイドの姿がいきなり消えた。すると、背中に今まで感じたことのないような電流が走った。

「——おい、いつたい、おれは……何を……したと……いうんだあ」

「ペンシルにあんなひどい辱めを受けさせたのにもかかわらず覚えていないとは。よくここまでぬくぬくと生きてきましたね。まあ、私の用事はこれで終わりました。ご主人様がお待ちですのではやくいってくださいね。ちなみに、ペンシルはあなたが列車から降りた時に初めて会った人のことですよ。」

俺の脳内に直接話しかけるようにしてメイドは俺に話した。

気持ち悪い感触だ。

ペンシルつて、あのロリのことだったのか。このメイドと一体どんなつながりがあるつていうんだよ。

「シユバルツ・ワールド、解除」

メイドは機械のような冷たい声で呟き、暗黒な漆黒のような空間は解かれたのであった。

そして俺は、気を失い砂漠のフンコロガシの餌食となるのであった。



## 桜柳邸の日常

「ご主人様、ルーフェルファ様を連れてまいりました」

「ごくろう」

聞き覚えがある声。そうだ、さっきのメイドと桜柳だ。俺はさっき死んだはずだが。

「お、お前は、桜柳だな。お前俺になんの恨みがあつてこんなことを。よくも俺の心を踏みじめる気だな。」

「ご主人様に向かつてこのような口を着きくなんて。許せませんね」

ロイドは手から直流を走らせる。

「ロイド、まあいいさ。こいつはそういうやつだ。」

「ですがご主人様」

「……ベルファ。お前はどのような奴だな。見ていて面白い。」

「な、なんだって」

久しぶりに桜柳に会えたと思つたらこのざまだ。俺はここに来るまで何のために

……

「ペンシル、ルーム。君たちも出てきてもらつても構わないかな」

「かしこまりました。ご主人様」

部屋の奥の部屋から2人のメイドが出てきた。黒髪と紫髪のメイドだ。紫髪のメイドは、床までつくような長髪で、髪で片目が隠れていて、滑らかな髪だ。なんというか、ペンシルやロイドと同じ程度な美人だ。

「お前が置かれていた状況を説明してあげよう。」

桜柳は塵を見下すような表情で言った。

「まず、3人のメイドの紹介だ」

メイド（ペンシル）「桜柳様の第一使用人のペンシルです。ご無沙汰しております。あなたのどうしようもない性格は全く変わっていませんね」

メイド（ロイド）「先ほどはどうも、ロイドです」

メイド（ルーム）「ご主人様の屋敷内での身の回りの世話をするルームです」

3人のメイドが棒読みで俺に自己を紹介をする。

「な、なんなんだいったい？」

「私の使用人だとも。お前に、は一生持てないものといってもいいのだろうか。」

ベルファ「は？」

桜柳は頭がおかしくなってしまうのか？そうに決まっている。人の心情は移ろい行くものだっていうけどこんなに変わるとは驚きものだ。

「まあいい。ロイド、ペンシル、ルーム。今のこいつの身に起きている状況を説明してやってくれ」

「了解しました。ご主人様」

3人のメイドは俺の目の前に立った。ペンシルが正面で立っていて、ロイドが左斜め前で立っていて、ルームが右斜め前立っていた。

ペンシル「ルーフェルファ様、率直に言うとおあなたはご主人様の逆鱗を逆なでしました」

ロイド「ご主人様の第一使用人であるペンシルを自分の欲望を押さえられずに欲望の赴くままにし、」

ルーム「異世界の住民の所有物を強盗し、」

ペンシル「神聖な川の水を汚しました。」

ロイド「その罪は重く」

ルーム「死刑では足りないぐらいのとても重い重罪です」

3人のメイドが順番に話している状況はまるで悪夢を見ているような不気味さを感じる。

「結局のところお前は、犯した罪を償うために何度も死んでもらうってわけだ。」

「はっごうしてだよ」

「そんなものに理由などあるわけないだろう。この世界は俺のものだ。つまり俺がやりたいとおりに動く。なあ、ペンシル、ロイド、ルーム。」

「「その通りでございます。ご主人様。」」

三人のメイドは寸分の狂いもなくそろって言うのであった。

そして、桜柳にべったりとくつつくのであった。

「俺はお前のことが好きだから、お前のことを探していたんだぞ」

「ところで、ペンシル、ロイド、ルーム。このあほ野郎を次はどうしまつしようか」

「ご主人様の思うようになさるのがいいと思います。」

ペンシルは赤く完熟したようなりんごのように顔を赤らめながら、桜柳に提案するのであった。その声の甘さといいべっとり感は今まで聞いたことがない。その声は、ドロドロな砂糖のような甘ったるい声だ。

「そうか」

ペンシルの頭をなで桜柳は言った。

「それじゃあ、永遠に異世界転生させて必ず死ぬようにさせるか。何度も死に、何度もやり直し、絶望に諦める。素晴らしいと思わんかね」

「「さすがはご主人様です。考えることが斬新で合理的です。ご主人様のような素晴らしい方のメイドになれて私たちは幸せです」」

「ふむ。ではロイド、また適当な世界にぶち込んでやってくれ」

「承知しました。」

「ベータシックスインプットアウトプットシステム起動。テレポーターションソフトウェア起動。テレポーターション、実行。ご主人様の想像する異世界へ。」

すると視界が真っ暗になった。

## メイドとの出会い

それは桜柳咲蘭が異世界に転移したときのことであった。

「俺は銀髪の美少女を助けた際にトラックにひかれ海に転落したのであったのだが、なぜこんなところに……」

桜柳は薄暗い旧型客車の中のボックスシートに座っていた。

機関車のドラフト音が車内に響く。

そう、この列車は以前ベルファが桜柳によって連れてこられた列車だ。

「車内販売でございます。冷たいお飲み物、おつまみはいかがでしょうか」

「あ、すみません。何か軽食とかがつてありますか？」

「はい、マヨネーズクッキー、ゴキブリの素揚げ、ミルワームの岩塩焼き、砂糖マシマシ油そば、チョコレート焼きそばパン、シヨートケーキカップラーメンなどがございます  
が」

「まじっ！」

見たこともないようなお品書きにおののき驚く桜柳。

「お客様もしかしてこちらの世界に来て間もない方ですか？」

「ああ。トラックにはねられて海の水雲モククズになったような気がするのですが、いつのまにかこの列車の中にいます。」

「左様でございますか。お客様はすでにご存じ理解されているはずの通り。もう死亡してしまいました。そしてこの世界の住人となる予定です。」

「この世界の住民つて、まさか異世界転移つてやつですか」

彼はハワイにいた時とても暇だったので、ネット小説で異世界転生ものの小説を読み漁っていたので、それが実現となり驚きを隠せずにいた。

「異世界転移……そのような言葉は聞いたことがありませんが。この列車はどのようなお客様が多数ご乗車なさいます」

「そうなんですか。あ、とりあえず、さつきのおつまみですが僕が持っている通貨はこの1万円札と500円玉、100円玉しかないのですが買えますか？」

「少々お待ちください」

そういつて車内販売のウェイトレスはカバンから機械のようなものを取りだし俺の1万円札と、500円玉、100円玉をその機械の中に入れた。

「お、お客様。これはミツマタですね。こんなすごいものを持っているなんて。どこから手に入れたんですか？」

ミツマタとは1万円札の原料であり、俺の元居た世界では普通にあったものだ。まさ

か1万円札が役に立ったとは。

「お客様、もしこんな私で良ければ……その、結婚していただけますか」

「結婚って……そんなにすごいものなのかこれ」

「はい。ミツマタをこんなに大量に所持しているなんて……この世界では考えられませんが。」

彼は元の世界にいた時から、もともと女子たちが集まりやすい体質であったのだが、結婚まで迫ってくるのは初めてであった。

「さ、さすがに結婚というのは早いですよ。そうですね、メイドでしたらいいですよ。」

「お客様のメイドになれるなんて……私もう、うれしくて仕方がありません。私、ペンシルと申します。いつまでもお客様……いいえご主人様についてまいります。」

こうして桜柳は彼自身の初めてのメイド、ペンシルと出会ったのであった。



## ミツマタの能力

——まもなく、終点です。

桜柳を乗せた列車は終点へ到着した。15両で出来た列車であったが降車する人の数は数えられるくらいしかない。数えるくらいの乗客の表情は皆薄暗く、死んでいるような眼をしていた。改札に向かっているとそこは石畳の道路にレンガ造りの建物が立ち並んでいた。

「ここは、いつたい……」

俺は日本とハワイにしかいたことがなかったので、このような光景を見たのは初めてだったので、驚きを隠せずにいた。そして驚いたのはこれだけではない。今まで俺がいた世界では架空の存在であったエルフがいたり、今じゃ考えられないような着物を着ている人たちが歩いている。

「まるで俺が読み漁っていた小説家になろうによくある世界観だな」

ため息つきながら言ったすぐに、桜柳はハワイで読んだ異世界転生物の本によくあるパターン、異世界で王になって無双するという手段を思いついたのであった。

「とりあえずその辺を歩いている人に王が誰なのかを聞いてみるか。そいつの立場を

乗っ取っちまえばこの世界は俺のもんだ」

しかし、その辺を歩いている人はどうも貧しそうな雰囲気漂っている。その理由は何なのだろうか。

そうこう考えながら、大通りの裏の裏路地に座って居眠りをしている、ぼろぼろの布切れのようなみすばらしい服を着て、裸足で、ざつくばらんに切れた紫髪の少女に声をかけた。

「もしもし、僕は桜柳咲蘭さくらやなぎさくらんというんだけど、君の名前を聞いてもいいかな？」

「私はルーム……」

ルームは地面を向いたまま答えたので、顔を見ることができなかつた。

「ルームさん、どうして君は下を向いているの？」

「顔を……見せたく……ないからです……」

俺が言っても、ルームは顔を見せたくないと言い続けた。

「僕は、どんな顔であろうが馬鹿にしたりはしないさ」

「そんなことはない……私はいろいろな人から馬鹿にされて……」

ルームは泣き出してしまった。自分がしてしまったことを後悔しているのだが、後悔だけではルームを救うことができない……

——なにかできることはないのか

そう考えていると、先ほどまでいたペンシルが現れた。

「ご主人様、到着が遅れて申し訳ありません。ご主人様についていきますといったのにもかかわらず……」

黒を基調としたメイド服に身を包み、ホワイトブリムをかぶって、優雅な足取りで歩くペンシル。駅に着いた瞬間に辞めて、俺のところまで来てくれたらしい。

——そうだ、ペンシルなら何かこの子を笑顔にさせてあげられることはできないだろうか。

「ペンシル、さっそく君に相談したいことがあるんだ。この子は顔に強いコンプレックスを抱いて泣いているんだ。なにかこの状況を打開できる名案はないかな……」

するとペンシルはきよとした顔で言った。

「ご主人様、あなたにはミツマタがあるじゃないですか。そのミツマタを1グラムほど使えば、彼女をあなたが思うような姿にすることができますよ」

なんてことだ、たかだか1万円札のミツマタにこんな力があるなんて……

早速、ミツマタを使うルームの姿を絶世の美少女のような姿にした。

するとルームは、

「うっ、うっ、私がこの姿に戻ることができるなんて……実は私、5年くらい前に両親を亡くし、街をさまよって新しい仕事を見つけたのですが、運悪くその雇い主は暴力を趣

味とする人で、私のことを暴行しつづけ、このような姿になってしまったのです」

「それはつらかったね。元の姿って言うってたけど、もしかしてこの姿が元の姿なのか？俺は頭のなかでお前の雰囲気合うような姿を想像してこの姿にさせたんだけど」

「まちがえなく、5年前の私の姿です。私、桜柳様のような方に出合わなければ……一生立ち直れませんでした。」

「俺のミツマタってこんなことができるのか」

自分がしたことで少女を助けることができた。俺は人の役に立つことは嫌いではないのでとてもうれしかった。

「もし桜柳様がよければ……私、桜柳様に一生ついていきたい……のですが……」

「そうな、隣にいるペンシルは僕のメイドなんだ。君もメイドになってくれるかな？」

「はい！なりたいです。桜柳様のメイドになれるなんて……私もうれしくて仕方がありません……」

「そういえばペンシル、ミツマタってほかに何に使えるんだ？」

「こんなことができるというより……ミツマタを使つてできないことを探すほうが難しいんです」

「な、なんだって！」

ミツマタを所持している俺は、何でもできる。

つまり、

「この世界の王になることもできる」

!!!!!!

## アンドロイドを作ろう

ペンシルとロイドと俺は異世界の道歩く。

周りの視線はなぜか俺たちのほうを見ている。そして、理由はわからないがうらやましそうにしている。俺も海の藻屑になる以前は、周りにうらやましそうにされたが、親友がベルファアしかいなかったので、特に興味もなかったので理由を調べようとはしなかった。

「ご主人様、なんだか周りの人がじろじろ見てますね」

「そうなんだけど、なんで見ているんだらうね」

「なんでか周りの人が私のことをずっと見ています。以前まで目をすぐにそらされたのに、今はじろじろ見てきますよ。目をそらされるのも嫌ですが、じろじろと見られるのもいい心地がしませんね」

「あ、ルームのことはいつでも見たい時に好きだけ見てもらっても構いません。いいえ、ずっと見ていてほしいです」

「あつ、えつ、わつ、私もご主人様にならずつと見ていてほしいです!!!」

「俺も君たちになら見ていても飽きないよ」

以前の世界にいたころの女性は、みんな同じような顔で見る気にもならなかったがルームとペンシルは見えない理由などない。

「おいてめえ、女二人もつれて何やってんだ！しかもお前見ない格好だなあ！出すもんだしな！そしたら手は出さないでやる！」

そう言うのと、いかにもな男が俺に襲いかかってきた。やはり俺はハワイで合気道を習っていたので、被害を防ぐことが成功だった。

「暴漢相手に戦うことができるなんて！ミツマタだけでなく実力でもすごいんですね！ご主人様のメイドである私がもう、もったいないくらいです」

「わ、私も、ご主人様のメイドになれて幸せです」

「やれやれ、暴漢なんて大したことないな」

しかし、王の立場を奪おうとしている俺の不足としては、自分の合気道の実力だけでは不十分がある。

そうだ！戦闘用のアンドロイドをつくらう！

桜柳は、財布から1万円札を取りだし少しちぎり、次の言葉を話した。

「戦闘用、メイドアンドロイド！」

ちぎられた1万円札から白い光がはなたれた後、しばらくしたのち、緑髪のメイド服姿のアンドロイドが誕生した。

「はじめまして、桜柳様」

「はじめまして！ミツマタってなんでもできるんだなあ。」

「桜柳様を作ってくくださらなければ、私は生まれてくることもできませんでした。ありがとうございます」

「ご主人様、この子の名前って決めてませんよね」

「ああ、そうだな、じゃあロイドでどうだ？」

「ロイド！私らしい素晴らしい名前です！ありがとうございます！」

そして俺は、王の座を奪還する土台を固めて万全であるのであった。



## 始まりの始まり

黒髪で小柄なペンシル、長髪で紫髪のレストラン、アンドロイドのロイド。

3人を連れて俺は王がいる王都に歩く。

「王都までの道のりは歩いて6時間ほどです。この草原を抜け、森に入り、砂漠を抜けましたら王都ですね」

地図を見ながら第一使用人、ペンシルが答える。

「ご主人様と一緒になら、6時間の道のりも一瞬です」

6時間……距離にすると30kmくらいだろうか。車で行けば一瞬の距離だが歩くとなると足が棒になりそうだ。どうにかしてでももつと楽をしたいものだ。そういえば、ミツマタって車も作れるんだろうか。

桜柳はミツマタを一かけらちぎり呪文を喋った。

「自動車！」

するとミツマタは瞬きする間に自動車に変化した。

「ご主人様、なんですかこれは？」

「これはね、自動車というんだ。早いスピードでどこまでも行ける俺がもともといた世

界の乗り物だよ」

俺はハワイで自動車の運転も習得済みなので自動車で王都に向かうこととした。

しかし、運転席に座りエンジンをかけようとしたが、うんともすんとも言わない。

「あつれーおかしいな、エンジンが始動できない……そうだ、ガソリンがないからか！」  
俺はガソリンタンクに一万円札をひとかけ放り込み、

「ハイオクガソリン！」

と騒いだ。

そして運転席に戻りエンジンを始動するとエンジンが始動し自動車を運転できる状態にすることができるようになった。

「な、なんですかご主人様！いきなり爆音と爆煙が放出されましたよ」

「あー、大丈夫大丈夫。とりあえずみんなもこの車の後部座席に座ってよ。」

「こーうぶざせきー？」

「あー、ここだよ。ここに座って」

そして、俺はアクセルを踏み倒し時速120km/hまで加速した。

流れるような景色に、メイドのロイドとルームとペンシルは、

「さすがはご主人様です！こんな便利な道具を一瞬でつくってしまうなんて！」

「自動車をつくるなんて大したことないさ」

アクセルをどンドン踏み、草原を抜け、森を抜け、川の中を走り、砂漠に入った。

「ご、ご主人様。ここは砂漠なのにちつとも暑くないです。もしかしてご主人様、魔法を使つて空気を冷たくすることもできるんですか!？」

「あー、これはエアークンデিশヨナーつていつて……まあこれも俺が元居た世界の技術さ」

「でもご主人様はすごいです。いいえ、最強です!」

「ご、ご主人様。私をつくつてくれてありがとうございます」

「わっ、私も人生を変えてくれてありがとうございます!」

「みんな、僕も君たちをもつと幸せにできるように頑張るよ」

「さすがはご主人様です!」

三人のメイドの目はとろけるような甘い目をしているのが、バックミラーから見ることができた。

数分後、砂漠を抜けた俺たちは王都に到着した。

先ほどの駅があつた街とは、雰囲気が全く違う。建物の裏路地に浮浪者はいない、みな元氣そうな顔でまちを歩いている、商売が盛ん、高そうな高給で見た目が華やかで華美な服を着ているような人が街を歩いているので、とても榮えていることがよくわかることから、ここは王都だということを実感することができることから、俺の王の座を奪

おうという気持ちの昂りは抑えることが二度とできないような高ぶりになった。

「ご主人様、さっきのまちではうらやましそうな目で私たちを見ていましたが、王都では化け物を見るような眼で見えていますね。やっぱり、ご主人様が作り上げた車が珍しいからですね」

「ご主人様、私は生まれてから間もないので見るものすべてが珍しく感じますが、こんなにすごいことだつて言うことがよくわかります。さすがはご主人様です！」

王都のメイン通りを抜け、王が住んでいるであろう立派なお城に到着した。

「王様が住んでいるお城の建物はじめてみましたーこんなに立派なんですネー♪」

そう、立派な建物だ。俺が住むのにふさわしいくらいの大きさ、華やかさ、きらびやかさは美しい。あと、広い庭園も。

屋敷の周りを周回するのだいたいどのようなつくりになっているのかがわかったので、門番のところまで行くことにした。

そこには、いかつい男二人が甲冑をかぶり警備している。

さつきからずっと俺たちのほうをにらんできている。まあそうするのも仕方ない。こつちの世界では物珍しい自動車に乗り屋敷の周りをぐるぐる回っているのだから。

もちろん俺は、そんな門番などにかまっている暇はない。

門番を車ではね飛ばそうと思ったが、下手気に車が傷ついたりすると修理するのが大

変なのでやめることにした。やはり、ここは会話で何とかするしかないだろう。

「もしもし、王に会いたいんだけど王はいるかな?」

「貴様、こんな見知らぬ物体に乗りこみ、奇抜な格好をしている奴に王に合わせられるわけないだろう!今すぐ帰らなければお前を真つ二つにするぞ!」

門番とは言葉が通じそうもないのでとつとこの場を何とかしたい。

そう思ったやさき、戦闘用アンドロイドメイドであるロイドが車から降り、

「ご主人様、私が無とくして見せます」

「ロイド助かる!」

「インプットアウトプットシステム起動!空間制御ドライバー起動、範囲指定、門番の周り、時空ストップ!」

すると、門番は氷のように固まり動かなかった。

「さすがはロイド!すごいですね」

「私にできることは戦闘のみ。戦闘でご主人様のお役に立ててうれしいです」

「ありがとう。ロイド!」

厄介払いができたので、さっそく屋敷に乗り込む。

「ご主人様、私もちよつとした魔法のようなものを使えるのでご主人様のお役に立てるよう最善を尽くしてまいります」

ペンシルは、ペコっとお辞儀をしながら言った。するとルームは泣きそうになりながら、

「ご主人様、私……何も……できなくて……すみませんご主人様さまああ」

「そうだルーム！ちよつと待つてな……『トランシーバー！』」

ミツマタが、2つのトランシーバーに変化した。

「これを使うと俺と会話ができることができる。君は屋敷の外の藪のところ危ない変化がないか見張つて、もし何かがあつたらこいつを使って連絡してほしい」

「離れたところで会話ができるなんて！ミツマタは、発想力がないと使いこなせない代物……それをそう簡単にたくさん便利なものを作り出してしまうなんて。本当にすごいです！」

「こちらの世界にはトランシーバーや自動車といった類いのものは発明さえていなかったようだ。そうと知れば、王都の戦いはハイテク機器を使いこなすほかにあるまい！」

王の立場を奪う戦いは始まり始めた。

## 玉座奪還

清々しい陽気、心地よい風。すべての条件が好条件で王の座を奪還する状況は整っている。そして、ペンシル、ルーム、ロイド。三人の仲間たちが俺をサポートしてくれる状況で王の座を奪還することを失敗するとは考えにくい。そう、もう恐れる必要などはない。もともとなかったが。

「じゃあみんな、そろそろ実行し始めるよ」

「はい！ご主人様。ご主人様なら絶対に成功します」

3人は輝いた眼で俺のことは見る。3人の信頼は厚く俺のことを常に応援してくれている。とても心強い。

「その前に、僕の1万円札はもう半分しかない。これだとちよつと寂しいんだが……」「そうですね、さすがにそれは少ないですね……ご主人様なら何とかありませんか？」

ミツマタの性質は作りたいものの名前を言えばその形に変化できる。ということはおつまり……

「1万円札！5000兆枚！」

半分しかなかった1万円札は、5000兆枚の1万円札に化した。

「ご主人様、なんですかこれは！貴重なミツマタをこんなに増やすなんて！」

「ミツマタは、作りたいものの名前を言えばその形に変化できる性質がありますが……その性質を使つてミツマタそのものの量を増やすなんて！」

「こんな発想普通の人には思いつきません！やはり私たちのご主人様は天才の域を超過しています！」

三人のメイドは赤面を紅潮させる。この発想がこんなに素晴らしいものだとは思わなかつたので俺は三人のこの反応に若干の驚きを覚えた。まあちよつとひねくれた考えなのだろうか。同じものを何枚も複製するということは。まあ所謂逆転の発想つてやつですよ。

「これだけあれば安心だ。それじゃあ屋敷に乗り込もうか！」

門の前で寝ている門番をあとして屋敷に侵入する。屋敷内は高そうな絵画、高そうなカーペット、高そうなシャンデリアなどがある。この世界を牛耳っている王なのだから、これくらいのものを所持しているのもまあ理解ができる。しかし、駅前の人たちが苦しんでいるような状況を見てなんとも思わないなんてひどい王だ。そんな王を首にして俺が王になつても誰も悲しむ人はいないだろう。

屋敷内を物色していると、剣を持った人が現れた。

いかにも強そうな人で街であつたら速攻警察を呼んで銃刀法違反で捕まえたくなる



ような風貌だ。

「お前はどこから入ってきた」

「ロイド、頼んだ。」

「ベーシックインプットアウトプットシステム起動！空間制御ドライバー起動、範囲指定、いかにも強そうな人の周り、時空ストップ！」

剣を持つてるいかにも強そうな人は動きを止めた。

厄介払いができたので、王がいそうな場所へ進む。

一階の部屋を総当たりしたが、誰もいない。この屋敷は2階建てなので、王がいるのは2階だと考えられる。玄関から正面にある立派ならせん階段を上り2階へ上る。

すると、奥の部屋に王が住んでそうな部屋があった。その部屋のドアはほかの部屋とは違うもので高級感があった。

ドアをけ破り、中にいたのはいかにも王様のような恰好をした人がいた。

「はじめまして、桜柳と申します。王の座を私に下さい」

「ああ？」

「王の座を私に下さい。王の座を私に下さるなら何もしませんから」

王は何が起きたかわからないような表情をしている。

平和ボケをしている証拠だ。

「なぜおまえなんかは王の座を渡さなければならぬ。よくもおれののんびりとした生活の邪魔をする気だな。おい、こいつを切り捨てろ」

「異世界空間に通じるゲート！」

桜柳がこう叫ぶと、異世界に通じるゲートができた。

「ペンシル、王と周りにいる人、時空をストップさせた人をこの中にぶち込んでもらつていいかな」

「承知しました」

笑顔でうなずくとペンシルは、

「ロイド、魔法をかけるときにこいつらが動くと面倒だから、そいつらの時空を止めてくれるかな？」

「わかりました」

ロイドが呪文を唱えると王と周りにいる人の動きが止まった。

するとペンシルは、そいつら腹を触り異世界へぶち込む呪文を唱えゲートを使って異世界にぶち込んだ。

「終わりました。ご主人様」

「ごくろう。それじゃあ俺が王になったわけだからこの世界の住民に通達をしておいてくれ」

「承知しました」

「ルーム、王の座を奪うの成功したからこっちにおいで」

トランシーバーを使い、ルームに連絡を取る。

「わかりましたご主人様。本当に私心配で、成功して嬉しいです！」

三人が集まり、お祝いをして俺が王になったのであった。

## 桜柳帝の普段

俺が王に即位して1か月。ロイド、ペンシル、ルームは俺のメイドとしてかなり楽しんできた様子だ。メイドになりたての頃のぎこちなさはなくなり今では家族のように仲良くなった。

午前7時、俺とロイドとペンシルは食堂に集まり桜柳邸の静かな朝を迎える。

「ご主人様、今日の朝食を用意しました。ご主人様が好きな味噌汁と岩魚の焼き魚です」  
ルームが調理した朝食がやってきた。

「おっ、おいしそうだねえ」

わかめと溶き卵の味噌汁、近所の川に住んでいた岩魚を塩焼きにして焼いたもの。焼き加減と塩加減が絶妙でルームの味覚にはいつも驚かされる。

「ご主人様が、ご主人様が以前いた世界の料理を教えてくださいのおかげです」

この国に最初に来て驚いたことは、料理のメニューのセンスが常識を超越している点だ。鉄道会社のウェイトレス時代のペンシルが紹介した「軽食」のメニューは今でもはつきりと覚えている。興味がある方は、「メイドとの出会い」をもう一度読んでいただきたい。

話がそれてしまったがこの世界は料理のメニューだけではなく調理方法もなつちやいなかった。この辺は山の頂上付近で標高が高いので、周りに流れている川は上流なので岩魚をはじめとしたおいしい魚を釣ることができる。しかし、このようなおいしい食材があっても調理方法が残念であつたらどんなに高級な食材もタダの生ごみとなつてしまう。

「魚に塩をつけるのと、ガスコンロを使うだけでこんなにおいしく簡単に料理が作れるようになったなんてやっぱりご主人様は天才です」

やれやれ、異世界は調理方法がとつともなく遅れているという話はネット小説でよく読んだのであるが実際にこうなっていると驚きを隠せなかつた。普通に考えて、塩をかければある程度おいしくなると思うんだが。

朝食を済ませた後は、異世界の住人から届いた意見に目を通し、それを何とかする。前の王の時代と違い、今は住民が自由に意見をする事ができるようになり王である俺に対する信頼がとて大きく変わった。なので、住民が反乱を起こすこともまあ考えられないだろう。

「最初ご主人様が、住民から意見を聞くなんて言つたときは王なのになんでこんなことをするのかと思いましたが、1か月たつとやっぱりご主人様は天才だということがよく

わかります。」

ペンシルは書類を整理しながら俺に話す。

そうそう、ペンシルは魔法だけでなく書類の整理が得意なのだ。

ちなみに俺はミツマタでパソコンをつくったのであったが、それはペンシルの仕事が減らしより高度なことをするのに貢献することができた。

このような日常はあつという間に過ぎ、日が暮れた。

「お休みなさいませ、ご主人様」

ペンシルとルームはそれぞれの寝室に戻って夜を過ごす。

「それじゃあ、ロイド。始めようか」

「はい、ご主人様」

屋敷の一室にロイドと俺は二人。

「ロイド、いつもありがとうね」

「ご主人様、私が存在できるのはご主人様のおかげです」

「まあまあそんなことを言うもんじゃないよ。僕が王になれたのはロイドのおかげでもあるんだから」

「そんな……」

アンドロイドメイド「ロイド」は赤面を紅潮させる。

「ロイド、何かあったときはまた俺とペンシルとルームを助けてね」

「はいっ……」

桜柳は、ロイドの肩に手を伸ばす。するとロイドは桜柳にもたれかかる。

「それじゃあロイド……」

「はい……」

ロイドの目からは涙のようなものが流れる。

アンドロイドメイド「ロイド」の動力はガソリンである。ロイドは毎晩ガソリンを補給しなければならぬ。この世界にはガソリンを精製する技術など整っていない。したがってこのように毎晩ミツマタをガソリンにしてロイドに補給するのだ。

「よし、終わったよ、ロイド」

「いつも私のためにありがとうございます」

## 五感とメイド

——死にたくない、死にたくない……。

ルーフベルファは、異世界に転生され非望の死を多数遂げている。

その原因は、桜柳の逆鱗を逆なでしたことが原因だ。

桜柳が飛ばした異世界は残酷で、ほとんどのすべての選択肢はほぼ必ず死ぬ、直結するようになってる。

——俺は、くつ、必ず、桜柳のところへ戻って見せる。

ベルファは、この異世界の残酷さから脱出することができれば桜柳にもう一度認めてもらえるだろうと思いい、必死であった。

離れていく四肢、ぼやけていく視界、あと流れ出る血潮。それらのすべてがベルファを絶望に陥れさせる。

そして、ベルファは3643回目の死を迎えた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ご主人様、そろそろルーフベルファを異世界転生させて2か月くらいになりますね」  
ベルファに辱めを受けさせられたペンシルは、書類を整理整頓をしながら思い出した



ように話した。

「ああ。あのゴミ野郎今頃どうしているかな。昔は結構いいやつで彼女もいるほどのまともな奴だったんだ。でも、あの行為を許すことはできない」

思い出すと非常に憎しみを覚える。俺の使用人に人としてしてはならないことをしたのだ。そのような奴を許すことなど俺には到底できることはできない。

「いつでも、私の見方であるご主人様は素敵です」

ペンシルは俺の近くに来て、俺によりかかった。なので、俺はペンシルの髪をなでた。「あの時は悪かったね。俺もあいつがあんなことをするとは思わなかったんだよ。本当に申し訳ない。もう一度たりとも絶対にあんな怖い思いはさせないよ」

するとペンシルは頬を赤らめて、

「私はご主人様にずつとついていきます。ご主人様に言われたことは絶対に従います。私が存在する理由は、桜柳様に絶対服従なんですから」

ペンシルの温度が高くなっているのを触覚で感じる。

「そうそう、ご主人様。本当にベルファアが死にまくっているか、今の段階でどうなってるかちよつと気になっているかもしれないです。実際に死ぬところを見てみたいものです」

なるほど。確かにベルファアが今どうなっているかちよつと気になるかもしれない。

「じゃあロイドに頼んでベルファがいる世界にちよつと行つてみようか」

ペンシル「はい。あつ、そのつ、ご主人様も一緒に来てくだされますか？」

「もちろんだよ。ベルファとお前を二人きりにさせることなんてもう一度もない」

あの人間の鏡にも置けない異常性癖者とペンシルを金輪際二人きりにさせることなんてできやしない。当然だとも。

「うつ、うれしいです。ご主人様と一緒になら安心です。行きましょう。私はご主人様にずっとついていきます」

そして、俺とペンシルはベルファが飛ばされた異世界の観測に行くことを決意した。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ロイド、ルーム。僕はペンシルと一緒にベルファのところへ見学しに行つてくるからお留守番をお願いしてもいいかな？」

この屋敷を空にすることはできないのでロイドとルームにはお留守番をしてもらうように頼んだのであつた。しかし、二人の表情は不満な表情をしていた。

「ごつ、ご主人様がいなくなるってことですか……」

顔泣き出しそうにしてまるで、紙をくしゃくしゃにしたような顔をして今にも泣きだしそうなルーム。

すると即座に平常は冷静なロイドが恐ろしい形相の血相に切り変えて、

「あの変態野郎のところへ行くなんて……ご主人様、もしかして私たちじゃ不満なんですか？」

いつもは冷静なロイドやルームがこういうタイプの反応をするとは驚いた。

「僕がここからいないということはありえないし、君たちに不満なんて一つもないよ。ロイドやルーム、ペンシルがいなくなるような生活なんて考えることもできない。3人そろっていないと僕の存在理由が霧散してしまう」

「ごっつ、ご主人さまあゝ」

ロイドとルームは口をそろえて言った。あと涙を浮かべて。

「でもご主人様、なぜペンシルと二人つきりなんですか？」

ルームは声を絞り出すような声で言った。

「いや、その、ペンシルがベルファが本当に痛い目が合わされているかが確認しに行きたいつていうんで……神算鬼謀はないよ」

ロイドとルームはジト目で俺のを見る。そういえば、こんな表情を見せたのは今回が初回だ。とてもかわいい。

……のだが、今回の状況はまずそうだ。

ロイド「私も、その、二人つきりでどこかに連れてつてくれますか？」

ルーム「わっ、私も」

ロイドとルームは声帯を揺らし揺らめきを感じるような震えるような声で言った。もしかして俺は、三人が三人を均等に見ていないと思われていた。しかし、俺はみんなをみんなと同じように平均的に見ているので、返答に困惑することは100%ありえることではない。

「もちろんだよ。三人が望むなら」

「私だけご主人様を独り占めするのはさすがに申し訳ないので、ルームとロイドもぜひ……」

ペンシルはロイドとルームに言った。

ペンシル&ロイド「ご主人様、絶対ですからね」

ロイドとペンシルは俺にくつつきながら言うのであった。

するとルームは、俺に近づいた。そして、その距離はルームの甘い呼吸が聴覚で感じるような距離だった。あと、ルームの髪の毛の匂いを感じる。

「どうしたんだ、ルーム。いったい?」

するとルームは俺の口とルームの口との距離が0距離になるまで接近した。

ルームのキスの味を感じる。

「る、ルーム!?!」

「ごっ、ごめんなさい。ご主人様が一瞬でも離れるのが怖くて」

ルームの表情は真つ赤になっていてぬくもりが熱かった。

ペンシル&ロイド「る、ルーム!？」

「ずっ、ずっ、ずるいですよルーム!ご主人様はみんなのものですのに」

ペンシルは言った。

「わっ、私も同じような考えを所持しています」

二人の精神が参り始めているのがよくわかった。なので、

「ロイド、ペンシル君もこっちにおいで」

「ご主人様、いいんですか?」

「僕はいつでも三人をなかよく均等に扱うって言っただろう。つまりその……言わなくてもわかってくれるよね」

ロイドとペンシルは恥ずかしそうな顔をした。

「ご主人様、うれしいです!」

そして三人は桜柳に寄り添いあうのであった。

## 自転車とメイド

それからいろいろあつたものの、ロイドの手を借り、俺とペンシルはベルファがいる異世界へいくことが出来ることを可能にした。純白の真っ白な空と草原。平野上等等といわんばかりの何も無い平野。凹凸のような凸凹など何一つありはしなかった。眼前に埋もれている地平線。いかにも人工的に作られたかのような何にも特徴がない平野だ。

「ご主人様、君が悪いですね。まるで出来損ないの安い3Dゲームの世界観みたいですよ。いや、どんなゲームでも真っ白な空に何も無い平原っていうのは見たこともないですよ」

ペンシルは、この平原の様子を的を射ており確かに表現した。異世界に3Dゲームがあることに驚いたかもしれない。しかし、俺がミツマタで以前の世界に存在したすべての家庭用ゲーム機とゲームソフトを作ったので、ペンシルはゲーム事情をよく知っているのだ。

「ベルファを絶望の断崖絶壁に陥れようとしたからね。このような何にもなく不気味さだけが広がる世界にしたんだよ」

「さすがはご主人様です」

ペンシルは、俺の腕にペンシルの腕を絡ませ縛る。あと、メイド服で露わになった横胸を押し付ける。普段の屋敷ではペンシルはおとなしいので、このようなことはしなかったわけで、どうして急にやってきたのかわからないので、不思議に感じた。まあこれは何というかちよつと感銘を受けさせられるのだが。

このように何も無い平原からベルファを探すなんてことは、雪山の中に隠した塩バニラアイスを探すような難易度で、千里眼なんぞ持たない俺やベルファにとつて、それは修行でしかなく、どうしようもならないため、俺はミツマタで、ベルファを探すための道具を作ろうと頭の中で考え始め、それを実行しようと考えている。

「ペンシル、ベルファを探すための道具をミツマタでつくろうと思うんだけど何かいいアイデアはないかな」

するとペンシルは息がかかるほどに近く顔を近づけて、

「そうですねえ……、ご主人様が作つてくださったゲームのモンスターを狩るゲームでは地図に敵があるかわかるようなものが表示されて便利なんですけど」

相手の位置を地図上に示すことができることができればそれはとても便利だ……そうだ！ベルファを探すことに特化したリーダーをつくれば！

おれは上着の上半身の胸ポケットの財布の入った袋から財布取り出しそこから1万

円札を取りだし、

「ベルファを探するためのレーダー!」

そう叫ぶと、1万円円札から白い眩い光がはなたれ、白夜のような光り輝く白い光に包まれ、白い光がベルファを探するためのレーダーに変化した。

パラボラアンテナのようなものと、ブラウン管テレビのようなモニター。スイッチを入れると2時の方向にベルファがいることが示された。

「おっ、見えたぞペンシル!」

「さすがはご主人様です!」

「いや、今回はペンシルのおかげだよ」

するとペンシルは顔を赤くし、

「私の……おかげ……」

「そう、ペンシルのおかげ」

「ごっつ、ご主人様あ……」

するとペンシルは、俺が抱き寄せられた。

ペンシルは非常に華奢であり、時たま小学生と間違えられるほどだ。抱いていてそのことがよくわかった。しかし、華奢でいるのにもかかわらず、柔らかく暖かい。

屋敷では寄りかかったりはするのだが、さすがに抱くのは初めてであった。



「そういえば、ペンシル。屋敷ではあまりこのようなことはしないね」

「あ、ごめんなさい。嫌でしたか？」

ペンシルは不安げそうな目でこちらの目を見る。

「いや、まったくそんなことはないんだけど」

ペンシルは両肩と背中をなで下ろし、

「その……屋敷の中だとみんなの目がありますからなかなかこのようなことはできなくて」

今まで気づかなかったが、三人のことをあまり満足感を満たされていなかったようだ。三人いることから均等的に扱わなければいけないことから、俺は特に何もしてこなかったのだが、このようにペンシルに切ない思いをさせていたのだ。

「ごめんね、切ない思いをさせてしまって。そういえば、ペンシルはこっちの世界にきて初めて出会った人だったんだよね。メイドになったのも君が原初。現在までペンシルと話せなかった分、今この世界で話して、もつと仲は良く深めようね」

「ありがとうございます」

ペンシルは今回は初回だが、一番の微笑を見せてくれた。とてもかわいい。

「さて、ベルファがいる方向が分かったことだしとつとと向かってみよう。徒歩で行くのもちよつとめんどくさいから、自転車で行くか」

「自転車？」

一万円札を自転車に変化を促しさせた。

「ご主人様、これはどうやって使用するんですか？」

「そうだね、僕が操作して動かさせるからペンシルはその後部座席に座ってちようだい。」

「こうですか」

ペンシルは後ろの荷台にまたがる。

「そうそう！あつ、このままじゃ座り心地が良くないね。『座布団！』これを後部座席の下に敷くといいよ」

自転車をこぎ始めると、ペンシルは俺にギョツとしがみついたのであった。

「自転車に乗るのは初めてなんだよね。はじめは怖いかもしれないけど風が体をなでおろすのは気持ちいい感じだと思っぞ」

しかし、ペンシルにとつて自転車が怖かったのか、ひよっとして違うかもしれないが、応えることはなく、強く俺にしがみついているのであった。

## ルーフ・ベルファアの逆襲

しばらく自転車を操っているとベルファアが横たわっていたのが確認できた。

泥まみれでボロボロになった服装に、こけた頬。この世界での生活の状況の最悪さの一端の情報の見識することができる。

「ご主人様、ひどい姿ですねえ」

ベルファアの姿を見てペンシルは直情的な感情を漏らす。

「ああ。まさにこいつの状況を短かめに言って『ひどい姿』だねえ。まあ、所謂当然の報いってやつかな」

俺とペンシルは見つめ合い、ベルファアを見てあざ笑う。

すると、

「お、お前は、桜柳なのか？」

「ああ。お前の残念な姿をちよつと見てみたいと思つてね。よくもあの時はペンシルを……」

「あのときは、どうしようもなかったんだよ。変な世界に連れてこられて右も左もわからなくて」

ベルファはあの時の状況の言い訳をしている。実にみじめだ。しかし、ペンシルは今にも泣きだしそうな、おびえている表情をしている。

「お前のくだらない言い訳なんぞ聞きたくない。お前はこの世界で永遠に苦しめ。苦しみ続けろ！」

「そうか、お前はもう俺を人として見ていないのか」

ベルファは俺に向かって泣き言のようなことを言ってきた。

「ああ」

もちろん即答でこたえる。ベルファなどもう人として見ていない。これからもそれは変わることはないだろう。

「俺はなあ。俺はなあ。お前のことがす……」

ベルファはまた何か言おうとしたが、これ以上こいつに付き合うつもりはないので膝蹴りを一蹴したので、ベルファはひっくり返ったので静かになった。

するとしばらくして、ベルファは立ち上がり、ペンシルの肩をつかんだ。

「お前これ以上この世界に俺をとどめさせるのならこいつがどうなるかわからないぞ」

「ゴ、ゴ主人様あ」

興奮してわけのわからないことを言うベルファ。そしてペンシルの涙が涙ぐんでいた。

「お前、ペンシルに触っていいでも思っているのか！」

怒りを抑えることができなかつたので、ミツマタでピストルをつくつた。

「ごっつ、ご主人様！殺人はいけません。ご主人様の手がこんな奴にけがされるのは嫌ですよ」

ペンシルがこう言うのでピストルを射撃することはやめた。ペンシルが言うのだから仕方ない。

しかし、このままではペンシルが危ない。なので、ハワイで習つた合気道の技をベルファにかけ、気絶させた。

「ご主人様あ。怖かつたです」

ペンシルは俺に抱き着いた。そして、俺の服に目をゴシゴシと擦り付けた。

「怖い思いをさせてすまなかつた」

「でもご主人様が殺人鬼にならなくてよかつたです。私のあこがれのご主人様が殺人鬼になるのはいやですから」

「ありがとう」

ペンシルの思いを受け取つた。

「それじゃあ、ベルファはここに固めておいて、帰るとしようか」

するとペンシルは、俺の袖をつかみ、

「あの……もう少しここにいませんか？」

「どうして？」

「ご主人様と二人つきりで過ごせたのは列車の時以来ですのうれしくて」

「こういうことなので、この世界でペンシルともうちよつと過ごすことにした。」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ご主人様、私思っていることがあるんです」

ペンシルは草原の目の先にある地平線を見てつぶやいた。

「どうしたんだい？」

「ご主人様と初めてお会いしたとき、私が言ったことつて覚えています？」

機関車のドラフト音が響き渡る旧型客車でのことを思い出す。あの時のペンシルは鉄道会社でウエイトレスをしていた。小学生にも見えるほどのきやしゃな体で重いワゴンを運んでいたペンシル。彼女の表情は今ほど豊かではなく、とてもつらそうに仕事をしているのを思い出した。

「ウエイトレスをしていて、俺がお金を払おうとしたときのことだよ。覚えているよ」  
ペンシルはメイド服越しに胸をなでおろした。

「よかった……今のご主人様は、安定な生活、安定な生活基盤、安定な権力がありません。初めてこちらの世界の住人になったときは、確かに無理がありました。今のご主人

様は、無敵です。ご主人様は、最強です。ご主人様は、無双です。ご主人様は、世界最強です。ご主人様は、最強の料理人でもあります。ご主人様は、最強スキルを持っています。ご主人様は、チートです。ご主人様は、私の救世主です。ご主人様は、賢者です。いいえ、ご主人様は、今までの小説の最強を表す言葉では表現できないほどのお方です。」

ペンシルは、必死になって、真剣に、話している。そしてペンシルは、数秒の間を開けて、

「ご主人様。いいえ、桜柳様。私は桜柳様なしでは生きていけません。桜柳様は、私の人生を変えてくれました。ウエイトレスとしてしか生きていけないような私に生きる理由を教えてくださいました。ご主人様は、私の英雄です。こんなちっぽけな私ですが、もしよろしければあなたの、一生のパートナーに……」

バババババババババーン！

突然爆薬が破裂するような音が聞こえてきた。すると目の前が真っ赤になった。すると、目の前で話していたペンシルが、ばたつと音を立てて俺のほうに倒れた。

「ご主人様！早く逃げて！私のことはここに捨てて……ルームと、ロイドのところ早く！」

ペンシルから流れる鮮血の生暖かさを感じる。でもペンシルを捨てることなどでき

ない。ペンシルは俺に……。

「ペンシル、そんなことを言わないでくれ！俺は今まで何とかしてきただろう。お前を見捨てることなんて絶対にしない」

「ふっ、格好の割ることをいつまでもべらべらと話せるもんだな」

するとさつき蹴っ飛ばしたはずのルーフ・ベルファの姿があった。なぜか機関銃を持っている。

「お前がさつき一万円札をピストルにかえているのを見てわかったんだ。一万円札があれば何にでも変えられるってね」

ベルファは一万円札をひらひらさせながら話す。

「アルフレートさん。この人ですよね」

「ああ。こいつで間違えない。俺の屋敷を奪い、俺をこの地へぶち込んだやつはこいつだ」

あのとときの王がなぜかベルファと一緒にいた。

「俺はお前がしたことの話聞いて絶望したよ。絶望のがけつぷちに立たされた。まさかお前が異世界の王様になって権威を振り回しているとはな」

ベルファは蔑んだような表情で俺を見る。

「そういうやつは死んだほうがいいんだよ」



するとベルファは機関銃で俺の心臓を貫いた。  
そして、草原の池の藻屑になった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

機関車のドラフト音が鳴り響く。

隣には、ペンシルがいる。どういふことだろうか。

「ペンシル、ペンシル、大丈夫か？」

「ご、ご主人様！よかった……。ここはどこです？」

「わからない。以前俺が乗っていた旧型客車によく似ているが」

「うそ……」

ペンシルの表情は青ざめた。

## ゼロからの再出発

レールのつなぎ目のガタゴトとした音のリズムが一定で僕とペンスルの間の空気に不気味さを与える。

「なあペンスル、この列車ってどういう人が乗る列車なんだ？」

「死んだ人が異世界へ転生するための列車です」

ペンスルは暗い表情で言った。

「そういうことか」

窓の外の車窓を見てみると、そこは真つ黒い世界が広がっている。ロイドが作るダメージマターを思い出すような黒さだ。

先ほドルーフ・ベルファに射殺されて殺害された俺とペンスルが同じ列車に乗れたことが不幸中の幸いなのだろうか。一人でも知っている人がいて安心だ。

「俺たちはどこに連れて行かれるんだろう」

すると、車掌がやってきた。帽子を深くかぶっていて表情がよく見えない。非常に暗い雰囲気をしている車掌だ。

「切符を拝見いたします」

切符だど?!俺はこの列車に乗るために乗車券の類を買った覚えはない。

「切符を拝見」

車掌がしつこく迫るので、いつも電車に乗るときには、ワイシャツの胸ポケットに切符を入れていたのでそこに手をつ込んだ。すると、そこには硬い感触。昔の硬券と呼ばれる切符が2枚入っていたので車掌に差し出した。

「確認いたしました」

切符には理解不能な文字が並んでいたので読めなかったが、この列車の切符を持っているようなので、車掌は入缺してくれた。

「ご乗車ありがとうございます。到着までもうしばらくかかりますがごゆっくり」

車掌はそう言い残して俺たちが乗っている客車をさつていった。

「ペンシル、これなんてかいてあるかわかるか?」

「これは……元居た世界に行ける切符ですね。ただし、時空平面が以前と違っています。以前よりも前の時空平面に行くきつぷになっています」

ペンシルの発言には時空平面という言葉があつたが、一発で理解することは当然でできなかった。

「時空平面?」

「私たちが以前いた時空平面A839634番でした。私たちがこれから連れて行かれ

る時空平面はA364114番です。まだご主人様がこっちの世界に転移する前の時空平面です。以前私たちがいたA839634番から私たちの存在はなかったことにされ、私たちはA364114番の住民になることになりました」

ペンシルはメモ用紙と万年筆を取りだし図を書いて説明した。

斜めの線を2本書き、上の線から下の線に移動したということを説明した。

つまり、依然過ごしていた時空平面と、これから行くことになる時空平面に連続性がないので、ゼロからやり直しになるといふことらしい。

「A364364番のルームとロイドはどうなるんだ？」

「それはわかりかねますが。そうですね、私とご主人様の存在はなかったことにされています」

「そうか」

「ただ、A364114番にもルームはいます。ちょうど、最初にルームと出会ったときのルームに会うことができます」

「なるほど」

列車は徐々にスピードを落とし、駅に到着した。以前ここへ来た時と様子はほとんど、いや何一つ変わっていない。そのまま過去の世界にきたといふことらしい。

ペンシルとともに改札を抜け街に出た。

石畳の道路にレンガ造りの建物。何もかもが以前と変わらない。その辺を歩いている人もどうも貧しそうな雰囲気があるので、あの王がまだ支配しているのだろう。ああ忌々しい。忌々しい。

「ペンシル、ルームを探すか？」

「そうですね」

俺の記憶が正しければ、裏路地にルームはうずくまっているはずだ。

薄汚い裏路地を探すこと30分。ようやく、それらしい人が見つかった。紫髪で、ぼろぼろの布切れのようなみすぼらしい服を着て、裸足で、ぎつくばらんに切れた紫髪の長髪の少女に声をかけた。

「きみはルームかい？」

すると少女は丸い目をさらに丸くして驚きを隠せないような表情をした。

「なぜ私のことを知っているんですか？ もしかしてあの雇い主の手下ですか？ 私はもうあんなところで働きたくないんですか？」

「僕はその暴力が趣味の雇い主とは全く関係ないよ。君を未来から助けにきたんだ」

「未来？」

「まあそのうち理解するさ。あ、ちよつと待ってね」

ポケットから一万円札を取りだし、ルームの姿を戻した。

「なっ？ なにするんですか？」

「ほら、鏡だ。これで見てごらん」

恐る恐るルームは鏡を見た。

「うっ、うっ、私がこの姿に戻ることができるとは……実は私、5年くらい前に両親を亡くし、街をさまよって新しい仕事を見つけたのですが、運悪くその雇い主は暴力を趣味とする人で、私のことを暴行しつづけ、このような姿になってしまったのです。まぢがえなく、5年前の私の姿です」

感動のせいか、ルームは涙を流していた。

「俺はこのセリフを以前に君から聞いたよ。全く同じセリフをね。君との思い出を君に復元できるといいんだけど」

もう屋敷での記憶も、車をつくってドライブした記憶も、王を倒した記憶ももはやルームの記憶からはなくなっている。いや、もともと存在しなくなっているのだ。

「ご主人様、ミツマタって記憶は操作できないのでしょうか？」

「ペンシル！ その手があったか！ さすがはペンシルだ。君は天才だよ」

そう言っつてペンシルの頭をなでると、顔を赤くし、

「ご主人様ほどではありませんよ」

といった。

そして俺はミツマタで記憶をインプットするための機械を作り上げ、以前のルームと記憶を同期させた。

するとルームは、

「ごっ、ごっ、ご主人様あー。私とても寂しかったです。どうでしたか？ ルーフ・ベルファは？ それとここは……まさかご主人様！」

「そう、俺とペンシルはルーフ・ベルファに殺されて過去に飛ばされてしまったんだ。すべては俺の不注意でね……」

「そんな……ご主人様！ 逆襲しましょうよ！ こんな仕打ちはひどすぎます！」

「ご主人様、私も同感です。ルーフ・ベルファは全く反省していませんよ。絶対にあいつを懲らしめてやる」

そして、ベルファを始末することを決心したのであった。

## 王の隠れ家

「ご主人様、これから先私たちはどうしたらいいでしょう」

ルームは不安げな表情で言った。

「そうだねえ。とりあえずルーフ・ベルファを何とかしようと思うんだけど、あいつはいつごろこっちの世界に来るのだろうか」

「ええーつと、ペンシルがベルファのところへ行ったのがご主人様と私が出会って半年くらいのことですよね」

物覚えの良いルームは答えた。とても頼りになる存在だ。

「じゃあこの半年間で基礎固めをしなければいけないな」

ベルファを破壊するための準備期間はおよそ半年。その間にできることを考えなければならぬ。やれやれ、ベルファを殺すことくらい簡単なことだとは思いが準備に躊躇せず木端微塵にぶっ飛ばして、微粒子レベルで存在を消し去らなければいけない。

前回は王の立場を奪い取ったのであるがなんだかルーフは王と異世界で仲良くしまったので、俺が殺されたことになっていたので、王になることは控えることにしたので、新しく俺とペンシルとルーム、あとロイドのすみかをつくらなければならない。あ、



ロイドをつくるのを忘れていたのでミツマタで記憶とロイドを作成した。

「ご、ご主人様……。まさかこんなことになってしまったとは。やはりあの時私はベルファを殺害しておくべきでした」

ルームはあの時のことを後悔していたらしい。しかし、俺が屋敷に連れてこいといったので殺さなかったのも無理ない。ロイドは全く無罪放免の濡れ衣なのだ。

「いや、君の手をベルファになんかに穢されるわけにはいかないよ」

「ご、ご主人様……」

ロイドは俺の腕に纏わりついた。

「ご主人様、早く住処をつくりましょう」

車を20分ほど走らせてみると、前回と同じように、草原、森、砂漠が広がっている。王都に住むのも考えたのだが、王の周りにいるのは危ないと思ったので森に住むことにした。

「なあペンシル、この森にある山だけどその山の地質ってどうなってるんだ？」

「そうですねえ、この辺は石が採れる山ですからとても硬くなっていますね」

石が採れる山。つまり地下壕をつくりやすい山だということだ。

「昔ここは王都で使う石を採掘するための山だったんですよ。でも今はあまり需要がなくなってしまうって廃墟と一人か二人くらいの住民しか住んでいません」

「そういえばベルファがここに来た時にこの住民を一人殺害していた気がする。なんてやつだベルファは！鍛えてやる！」

「(ご)主人様、ここに私たちの家をつくりましょう」

ロイドとペンシルとルームは寸分狂わず一度に言った。

切通から山の中の採石場に入ることができたので、三人で入ることにしたが中は真っ暗闇であつたので懐中電灯をつくり手元を明るくした。

「(ご)主人様の発想はやはりすごいです！火を使わずに明るさを作り出すなんて！」  
ルームは目を輝かせていった。

懐中電灯もこちらの世界では珍しいものであつた。まあこの世界では電気を使っているとところを見たことがなかった。屋敷でも自分で発電機をつくってガソリンで電気をつくっていたくらいだ。やれやれ、なんでい世界って思い描いたように文明が遅れているのであろうか。

「(ご)主人様——寒いです……」

肌の露出度が多いメイド服をきたペンシルはとても寒そうにしていた。メイド服ではない服をつくることを提案したが、なぜか三人は頑なに拒否し続けた。

「このメイド服は(ご)主人様との思い出がたくさん詰まっていますし、その……」

ペンシルは「その……」といったものの顔を赤くしてそこから先を言ってくれやしな



## 告白

ロイドはガソリンで動いているアンドロイドだ。自らエネルギーを作り上げる機構は持っていないロイドにとつて俺はなくてはならない存在だ。ミツマタをつかつてガソリンをつくりそれをロイドに補給させる。毎日このようにロイドは俺のところきて、生きるための糧を補給しているのだ。

「ごめんねロイド。もうこんな間に間を空かせるようなことはしないよ。こっちへおいで」

するとロイドは俺の膝の上にもたれかかった。

呼吸の頻度が多くいかにも苦しそうにしている。

「ご主人様がいてくださるおかげで私は生きていきます。こんな私をいつも見捨てないでいてくれて、ありがとうございます」

ロイドは赤面して言うのであった。

ミツマタを石油にかえてそれをロイドに補給する。

「君はルーフ・ベルファを消す際に最前線で戦うことになるかもしれない。でも俺はお前を傷つけたりはしないよ」

するとロイドは、

「どんな出来事があつてもそれを乗り越えられるご主人様を私は信じています。なので、私はご主人様の味方です。ずっとです。」

俺はロイドの緑の髪をなでるのであつた。

するとペンシルがドアを開けて部屋に入ってきた。

「ご主人様、私……寂しくて」

ペンシルは、目をうるわし、頬を赤く染めて言った。

「今晚はご主人様と一緒に……いたいんです……」

そう、ペンシルは死ぬ間際に俺に言った。俺のことが好きだと。

「ペンシル……」

「私はご主人様と結婚したいのです」

するとペンシルは、椅子に座る俺の前に回り込み、頬に両手を添えて、唇をあわせた。

「ペツ、ペンシル」

今起きている状況を理解するのに数十秒かかった。

俺はペンシルにキスをされているらしい。

唇に感じる暖かい感触は新鮮で、いままでに感じたことがないぬくもりであった。

「ご主人様、私はご主人様と結婚したいです」

「ペ、ペンシル！そしたら私は……」

一応ロイドはメイドでもある。ペンシルと俺が結婚したら三人の間柄に亀裂が入ってしまふ可能性がある。だからか、ロイドは非常に焦りを覚えていた。

「もちろん、私一人がご主人様を独り占めするのなんて、できません。ご主人様のような素晴らしい方を独り占めにするのは、私には役不足です。」

ペンシルは笑顔で言った。

「ルーム、入ってきていいよ」

するとルームは恐る恐る部屋に入り、泣きそうな顔……と表現すればよいのかどうかよくわからないがそのような顔で、

「ごっ、ご主人様、私もご主人様と結婚したいです」

ルームは、のどから声を絞り出すような声で言った。

「私もご主人様がいなければこのような生活はできずに、一生奴隷のような生活をしていました。ご主人様のおかげで私は自分の存在理由がわかりました。私はご主人様に一生ついていきたいです」

「そ、そんな……俺なんか……」

俺は俺自身がそのように言われていいのだろうかと疑問に思った。

いままでは、このように結婚してくれとか、俺がいないと存在理由がわからなかったとかを言われたことはなかったの、正直とてもうれしかった。

結婚……ペンシルに列車で言われたときから遠ざけていた言葉の一つであったのだ。

そうこう考えていると、ロイドが、

「私はアンドロイドです……私に結婚という概念が存在したらその……私も結婚したいです」

ロイドも立派な人間だ。その辺の人間よりも人間味がある。そうだ、俺はそうするしかない。

「ペンシル、ルーム、そしてロイド。僕と結婚して一生一緒に暮らそう」

そして三人は俺のお嫁さんになることになった。

## 披露宴パーティー

結婚して初めての夜が明けた。結婚といつても結婚したいですと言ってOKをしただけなので正式な結婚とは言えないだろう。昔の、この国の結婚の作法がわからないので、ペンシルに聞いてみることにした。

「結婚した相手と杯を交わします。とりあえずは」

ということなので、ロイド、ペンシル、ルームと杯を交わすことになった。

その杯の味は、複雑な味がした。

\*\*\*\*\*

\*\*\*

「みんな、今日はパーティーを開こう。おいしい料理を作って一生の思い出に残る思い出にしよう！」

するとルームは、

「ご主人様、よかつたら3人で協力して料理を作りませんか？」

続けてペンシルが、

「ご主人様との思い出で記憶に残らないものは何一つ存在しません。パーティーは楽



しそうです！」

「よし、じゃあ七面鳥の照り焼きと、ケーキ、ステーキ、ピザ、サラダといったところかな。ほかに何か提案はある？」

「ケーキ？ピザ？……なんですかそれは？」

「あれ？今まで作ったことないから知らないか。よし、とてもおいしいから、作ってあげるよ」

「いつもの料理がとてもおいしいのに。もっとおいしい料理を作るなんてさすがですごい主人様！」

という調子で、パーティーの準備は始まった。

金庫から一万円札を取り出し、今回のパーティーに必要な材料を作り出す。

「七面鳥、醤油、和風ソース、牛肉、小麦粉、卵、砂糖、チョコレート、トマト、ピーマン、ベーコン、レタス、コーンと……とりあえずこれだけあれば作れるかな」

次々と一万円札が料理の材料に代わるのを見て、ペンシルとロイドとルームは目を丸くさせる。

「ご主人様あ、この材料をどう料理するんですか？」

ルームは好奇心を持った子供のように俺に尋ねた。

「まあちよつと待ってな」

俺は昨日ミツママで作った電子レンジとガスオーブン、ガスストーブを使い先ほどのメニューを完成させた。

「すごいです！ご主人様。こんな料理見たことがありません。見ているだけでも楽しいです」

ロイドと、ペンスルとルームは驚いた表情で目をキラキラと輝かせた。

「でもちよつとこれだけじゃ足りないな」

「そうだ！」

「プリンを作ろう！」

「プリン？　なんですかそれ」

ペンスルは不思議そうに聞いてくるのであった。

「作ってみるね……あ、作り方がわからないのと料理が覚めてはいけないからミツママで作ることにするよ」

そして俺は、ミツママで、ホイップクリームがのったプリンを作った。

「見たこともない物体ですね」

ロイドは不思議そうに見つめる。

「とてもおいしいよ」

すると三人はプリンを一口ほおぼるのであった。

「すごいです！ ご主人様！ 普段の料理でさすらおいしくて仕方ありませんのに。こんなに甘くて、濃厚で、おいしい食べ物初めて食べました」

ペンシルはプリンを食べながら幸せそうに感想を述べた。

「ごっつ、ご主人しゃまあー。おいしすぎて、ほっぺがおっこちてしまいしようにおいしいです」

ルームがキャラ崩壊、もとい、おいしさのあまり感情を正常に保てずにいる。確かにこっちの世界の料理は、あまり優れているものではなかった。

結婚のパーティーは盛大に行い、疲れ果ててその場に寝落ちしてしまうのであった。

## 殺意

ついにこの日が来た。

太陽がきらきらとひかり、俺の皮膚を焼き焦がす勢いが熱い。

今日は異世界からの列車が到着する日だ。

そう、ついに待ち望んでいた日が訪れたのだ。

永遠の天敵。「ルーフ・ベルファ」がこっちの世界に尋れてくるのだ。

奴に殺されて、過去の世界に戻った俺はルーフ・ベルファが初めてこちらの世界に訪れるよりも前の時間に来たことになっている。だから、ルーフ・ベルファは、本日この世界に初めて訪れるということになるのだ。

ペンシルに辱めを受けさせて、俺とペンシルを殺害した。奴は許される余地など微塵たりとも存在しないのだ。

「ご主人様、ルーフ・ベルファの件。どうしますか？」

ペンシルは真剣なまなざしをした目で俺に尋ねる。

ルーフ・ベルファ、忌々しきの象徴のような人には、屈辱感のシンボリックな苦しみを味合わせていただきたい。

「よし、(う)うしよう」

ホワイトボードとマーカーを用意して、ペンシルとルームあとロイドに作戦を伝える。

まず、列車が到着してすぐに、ロイドの必殺技、「シユバルツ・ダークマター」を発動させる。ちなみに、シユバルツ・ダークマターとは、周りの時空を止めることで、攻撃対象以外の動きと時間を止めることができる、ご都合主義的な結界のようなものだ。

さて、「シユバルツ・ダークマター」を発動させたのちは、ベルファをこん睡させる。

そして、この要塞に連れ込み、3Dプロジェクトを使い、列車の中を再現する。

そして、ペンシルを再現したものを用意する。

当然ルーフ・ベルファは欲望に駆られてペンシルに手を出すだろう。

そこで俺が、ベルファにとどめを刺す。

完璧だ。

ということ、三人に伝えた。

すると三人は、

「「すーいですー！ご主人様。この計画でしたら完璧にルーフ・ベルファを消し去ることが可能ですね」」

三人は驚いたものを見たような表情で俺を見て驚いた。

\*\*\*\*\*

計画を伝えることができたので、4人でルーフ・ベルファが到着する駅へ向かった。相変わらず、駅前には死んだような空気が漂っている。人々の希望に満たされない表情は何度見ても心のどこかに息苦しい感情を覚える。

「ご主人様、やっぱりご主人様が王にならないとこの世界はダメなままですよ」  
ルームは上目遣いの目で俺を見た。

後を続けてロイドが、

「ご主人様、ルーフ・ベルファを始末し終わったら王になりましょうね。ぜったいなんですからね」

「ああ、絶対そうしてやる」

俺の将来の身分は王になりたいと心から決心したのであった。

そうこうしているうちに、プラットフォームに列車が到着した。

車掌が扉を開けてすぐに、ロイドはシユバルツ・ダークマターを発動させた。

「よくやったロイド！」

そういつて彼女の頭をなでると、なぜだか彼女の顔が赤くなった。

さて、周りの時間を止めたので、驚きふためいているルーフ・ベルファが列車からあほみたいな面をして出てきた。

「この世界はどうなっているんだ？」

相変わらずの、あほみたいな日本語不自由でいうルーフ・ベルファ。

寸分の隙間もないほど短時間の間に、ロイドはルーフ・ベルファを気絶させた。

そして、ルーフ・ベルファを屋敷にもっていった。

作戦通り列車の車内を再現する。

「起きろベルファ。いつまで寝ているんだ」

ベルファに声をかけると、ベルファは飛び起きた。

「?????!!  
「ここはどうかっているんだ。てか、お前は咲蘭か？」

「おあ」

俺は冷たく答える。

「桜柳、俺を列車でここまで連れてきて何をするつもりなんだ？個人的に旧型客車に乗れたことはうれしかったんだけどさ。まあ、こんな宇宙の果てに来ちまったよ。やれやれ、お前は何を考えているのかさっぱりわからん」

ベルファはよくわからないことを言っている。やはり頭がくるっている奴だ。

狂っている奴には、この状況を説明しなければならない。

「思い出とは無価値なモノ、しかし、その在り方はいかかようにも変化する。ここは君の精神世界。故に明白。君はいないはずの『彼女』をカンパネラに当て嵌めている。これは君の思考、そうありたいと思った一つの理想。まあ、『彼女』の生存に関して、君の理想とズレはあるかもしれないがね。」

今の状況を説明した。しかし、そのまま自分の姿でいうのは少しつまらないと思ったので、こいつの数学の教師にだんだんと姿を変えていった。

「お前は数学のじいさん……」

「まあ君にはそう見えるのだろうか」

「まあ忘れるはずはないさ、お前の特徴的な髪形は忘れられない。そんなことはさておき間もなく終点って言ってからなんで15分以上も走り続けているんだ？」

「相変わらず口のきき方になっていないな、君は。言ったはずだろう、ここは君の精神世界だと。まあこれ以上君にヒントを与えるつもりはない。せいぜい頑張りたまえ」



「なるほど」

ルーフ・ベルファは、俺のほうをみて納得したような表情をしている。まんまと罠に引つかかっているのが実に面白い。

「どうやら理解したようだな。さすが、私の見込んだ男だ」

「……つまりはこういうことだろ——」

そう言いかけたベルファに俺は隠し持っていた麻醉銃をベルファに打ち込んだ。

\*\*\*\*\*

そして、3Dプロジェクターの設定を、俺とベルファでよく訪れていた公園へ設定した。

そして、睡眠薬の効果が切れたのでベルファは目が覚めた。

この公園の風景を見て彼は、

「懐かしいな……。なあ、いるんだろう。咲蘭」

と、寝ぼけたことを言っている。

そこで、作戦通りペンシルを登場させる。

「なあ、咲蘭」

ペンシルは、迫真に迫る名演技でベルファに話しかける。

その姿の迫力は、ぶったまげるものであった。

動揺したベルファは、

「ちよつとまって、ちよつとまって、俺は桜柳でも咲蘭でもないぞ。中学のころから小説を書くことを趣味としていて、LINEグループで小説を投稿しあたりしていつ、数学もできる天才ルーフ・ベルファだぞ。なんだって俺が桜蘭なんて呼ばれないといけないんだ。もう俺は頭がおかしくなってしまう。簡単じゃねえよ。平常心を保つの」

と、わけのわからないことを言っている。すると、ベルファは続けて、何かを理解したような口調で言った。

「ああ、なんだよ、そういう事かよこんな事にも気がつかなかったのかよ俺はよーああ、分かってきているさ。数学のじいさんは言っていた。思い出は無価値でも、精神世界ならその在り方は変化する。ならこの少女は無視すべきだ。今、この瞬間、俺が向き合うべき相手は——っ!!」

中二病患者のような意味不明なことを発言しているのでペンシルは、

「あのー無視しないでいただきたいのですが」

と、キスでもできそうな距離まで近づいて言った。

そして続けて、

「何ボーッとしてるんですか、こんなところにいたら流れ弾が当たりますよ。ここは、自衛隊も警察も何にもない危険なところなんですから。ボケーっとしていたら危ないです」

ベルファを惑わす甘い声で演技をするペンシル。すると、ベルファは、ホイホイと食いついてきた。

「俺に流れ弾が当たることを心配してくれてるのかい？ただ、俺にはその優しさを受け取る資格はないんだ……なぜならね……」

と、変なところで発言を止めたのち、

「俺は、桜柳がすぎだから。」

などと、常軌が狂った発言をした。

……のであったが、

「べ、べつに、一人じゃなくてもいいよなあ。うんそうだとも。好きな人は何人いたっていいじゃないか。そうだよそうだよ。」

などといった。

前回は、このタイミングでペンシルに手を出したので、ペンシルにはここでベルファをぶんなぐっていただけ。

するとベルファは気絶した。

なので、俺はこいつを始末することにするので、3Dプロジェクトの部屋へ侵入する。

ここまででは計画通りだった。そう、ここまででは。

## ルーフ・ベルファアの終演

「ご主人様、ごめんなさい」

ペンシルは最後にこのようなことを言った気がする。

俺が3Dプロジェクターの部屋に入ってペンシルに「ありがとう」と言おうとした瞬間であった。俺の体は金縛りにあったように動かなくなっていたのであった。

「(ご)主人様あん！」

外で見ていたルームは泣き叫びながらこの部屋に入り込んだ。

「ご主人様、何やってんですか。まだ作戦は途中じゃないですか」

「ルーム、ここから離れて。私は上からの命令を処理しなければなりません」

ペンシルは無表情で言った。

「そんな、ペンシル！今まで怪しいとは思ってたけどご主人様をこんな目にあわせるなんて」

普段物静かなルームがここまで叫ぶことは珍しい。

そしてルームはペンシルの胸倉をつかもうとした。するとペンシルは魔法でルームを突き飛ばして壁にたたきつけた。

「抵抗しても無駄です。私はあなたを傷つけるつもりはありません。桜柳を処理するだけですから」

「そんな、ペンシル。私と、ご主人様と、ロイドとの今までの楽しい思い出は全部演技だっていうんですか？」

「そのとおりです」

情熱的なルームの発言にペンシルは冷たく投げ返す。

「ペンシル。ご主人様はね、ペンシルのことを三人の中で一番愛しているってことわかんかったんですか？」

「それはそうなるように仕向けましたから」

「でも、あそこまで積極的なこと演技じゃできないじゃないですか。そのようなことくらい私にだってわかりますよ」

「演技は演技です。私が演技と言っているのだから演技です」

「そんな……いままでの思い出で楽しいと思つたことはなかったんですか？」

目に涙を浮かべてつぶけた、

「私はとても楽しかったですよ。どうしようもなかったご主人様に拾われて、ペンシルの提案で私は今の生活をする事ができるようになりました。ロイドと、ペンシルとご主人様とたくさんのかんことをしました。ミツマタで作った自動車に乗ってドライブした

り。あの独裁者を押しつけて王になったり。ミツマタで作ったご主人様のビデオゲームはもう面白くて時間を忘れるほどの熱中をしました。4人で対戦したあのゲームの楽しさは今でも忘れられません。あと、4人で作った料理。あの味は今でも覚えています。毎日が新鮮で4人で暮らした日々……ペンシルは何にも感じなかったんですか？」

「……」

ペンシルは沈黙した。

「でも、私は命令を処理しなければならぬんです。それはどうしようもないことなんですよ」

今まで無表情だったペンシルは涙をこぼした。

「だったらどうして」

ルームは言った。

「私は上からの命令を聞かなければいけない。いわば人間ロボットなんです。反論する権利なんてありません。反発した瞬間に私の存在はなかったことにされます。つまり消されるってことです」

「みんな、もうよしてくれ」

俺はミツマタで護身用に万能なる「魔除け」を作っていたので、金縛りを解くことが

できた。

「喧嘩は、しないでくれ」

「ご主人様！」

ルームは言った。

「ご主人様、なんで私の魔法が」

「ペンシル、ルーム……あとロイド。俺を誰だと思ってる。おれは、桜柳桜蘭だ。俺にできないことなんてない。このミツママがある限り。だからよお、俺のまえでどうしようもないなんていうな。そして、涙なんて流さなくてくれ。俺たちは4人で一つだ。誰がかけてもだめだ。だからよう、進み続けなさいといけないんだ。」

「ご主人様、でもわたしは」

「俺は君が好きだよ。ペンシル。もちろん、ロイドもルームも」

「ペンシルがあの時言ってくれたこと。本当にうれしかったんだ」

「ご主人様」

ペンシルは複雑な表情で答えた。

「確かにペンシルと俺との出会いは非常に不自然であった。まず、見ず知らずの人に結婚しようだなんて普通は言わない。それに、結婚ができなければメイドになつてくれだなんて」



今まで黙っていたことをここで言った。

「最初は少し疑っていた。でも、ペンシルは最初は演技をしていたけど、だんだんそれがそう感じなくなっただんだ」

「そ、そんな」

「ペンシル、もう上の命令に従う必要なんてない」

「で、でも」

「お前の言うその上の人の存在は今消えてなくなろうとしているんだから」

「そうだろう！」

俺は、ボックスシートで気絶しているルーフ・ベルファの頬を引っ叩きながら言った。

「う、うそー！」

ルームは顔が青ざめた。

「ロイド！ いまだ！」

「承知しました！ ベーシック・インプット・アウトプット・システム起動、バトルオペレーティングシステム（ターミネーターモード）、空間制御ドライバー、読み込み完了。シユバルツ・ダークマター！！目の前の男『ルーフ・ベルファ』を敵性と判定。」

ロイドが叫んだその瞬間周囲は真っ黒な暗黒な漆黒に包まれたのち、ルーフ・ベルファが砂場に変化した。そしてその砂が次第に細かくなり、存在すらも見えなくなっ

た。

「シユバルツ・ダークマター解除。ご主人様、ルーフ・ベルファをすべての時空平面状から消去しました」

「そ、そんな。今までそんなこと不可能だといわれてきたのに」

「俺は洞察力にも優れた桜柳だ。不可能なんてないし周りで何が起きているかもすぐに判断ができる」

「さすがはご主人様です。」

ルームは今までで一番うれしそうな表情をした。

「ご主人様、今まで騙ってきてきて本当に申し訳ございません。」

ペンシルは涙をこぼしながら言った。

「ペンシル、涙なんて流さないでくれ。君もつらかったんだろう。わかってるって」

「ご、ご主人さまああああ」

ペンシルは泣きながら俺の胸に抱き着いてきた。

天敵であるルーフ・ベルファを処分することに成功したのは目標はもはや一つしかない。

## 前日の夜の悪夢

それは、ルーフ・ベルファを始末する前日の夜のことであった。

「ご主人様、入室してもよろしいですか？」

ロイドはいつも通り俺の部屋に来た。

「どうぞぞ」

大理石でできた扉を開け、ロイドは俺のひぎに座った。

「ロイド、明日のことなんだけどね」

「どうしました？」

「ペンシルのことなんだが何か思うふしはあるかい？」

ロイドは、顔の表情を険しくした。

「やはり何か思うことがあるんだね」

「まあ。ないと言ったらうそになります」

「この時空平面に来る前、俺はルーフ・ベルファに殺された。その時のペンシルの行動に少し違和感を感じたんだ。」

「といますと?..」

「やたらとあの空間から出ることを引き延ばそうとしていてさ。まるで俺がルーフ・ベルファに殺されることを知っているかのように」

「そ、そんなことがあったんですか」

「まあ、あくまでもこれは俺の憶測に過ぎないんだけど。ちよつとあまりにも出来すぎていると思つてね」

「でも、ペンシルのきな臭さは最初よりはずいぶんマシになっていきますよ。最初はともぎこちない感じでご主人様と接していたのですが最近は違います」

「それは俺も思っていたところだよ。ペンシルはたぶんルーフ・ベルファに雇われている。でもそれはやりたくてやっていることではない。だからロイド。君の手を貸してくれないか。ペンシルを救いたいんだ」

「ご主人様の言うことならなんでも従います。それが私の生きがいですから」  
「ありがとうロイド。じゃあ今日のお約束を始めようか」

ロイドの髪をなで、目にかかるほどの髪をよけた。

そしてロイドにガソリンを注ぎ込む。

ロイドの表情は艶っぽい表情をしていてそれはまるでこの世のすべての美を具現化したようなものであった。

「ロイド、明日はシュバルツ・ダークマターを発動してほしい。そしてルーフ・ベルファ

を処分する」

「ご主人様、私はご主人様の味方です。絶対に裏切ることはありません。私をご主人様の駒としてご自由に使用ください」

「俺は、君を使い捨ての駒だとは思ってないよ。ロイド。君がいないと生きる理由をなくしてしまう」

「ご主人様……」

ロイドの頬は紅潮していた。そして涙を浮かべていた。

だから、俺はロイドの唇にそっと口づけをした。

「ご主人様、いけませんよ。ほかのみんなに怒られてしまいます」

「僕はあくまでもみんなを平等に扱うよ」

「さすがは私のご主人様です」

ちょうどそのころペンシルは、自室で涙を流しているのであった。しかし、それを知るものは今の時点ではだれもいなかった。

## アンドロイドメイドは桜柳咲蘭の夢を見るか

わたくし、桜柳咲蘭のメイド兼お嫁さんのロイドと申します。

ご主人様の手により作られました、アンドロイドです。主に非常時の事態の時の戦闘の際のご主人様の身の安全をお守りのが私の役目です。

人間ではないため「アンドロイド」。いわば人造人間である私を人間のように愛情を持ってくださっているご主人様は、とてつもなく素晴らしいお方です。私は桜柳様を尊敬すると同時に寵愛して愛しています。

そんな私と、桜柳様とペンシルとルームの日常を話していきます。

さて、私のご主人様の敷地内の屋敷での楽しい日々の始まりはたいはい次の文の言葉でスタートします。

「ルームさん、朝になりましたよ。ご主人様のお食事の用意をする時間です」

私たちメイドの部屋は個別に一人一人の部屋が与えられていて、廊下から向かってレフト側がペンシル、センターがルーム、右側が私の部屋です。私は朝になると、料理の腕が得意なルームを起こしにルームの部屋に行き、ルームを起こしに行きます。

「あ、ほあー。あつ、おはようございませう。ロイドさん」

ルームは目覚めがあまりよくないので、いつも朝は早いので、寝ぼけているので、そう感じます。

「今日の朝ご飯は何にしましょう?」

「ええーと、新鮮な鶏のおー、鶏卵が入ったのでスクランブルエッグか目玉焼きにしようかなと」

ご主人様は、ミツママで食材や料理を出すことができますがそれだと味気が感じられないということなので私たちが料理を作っています。

「それじゃあ今日はスクランブルエッグとウインナーと黒パンがいいですね」

スクランブルエッグとウインナーをフライパン使って料理します。あとガスコンロを使って。この画期的で万能的かつ利便性な調理器具、フライパンとガスコンロはご主人様がミツママで作ったもので、私たちの朝の料理をとて簡易で簡単にしてくれました。さすがはご主人様です。

「あつ、おつ、遅れてすみませーん」

メイド服を着用しながらペンシルが厨房になだれ込んできます。彼女は早朝がとてつもなく弱者なので私は彼女は起こさないように寝かしていました。ある過去に無理

やり起こした時には……思い出したくないので割愛します。

「おはようみんな。おつ、今日の朝食もおいしそうだね」

料理ができたころ、御身を清め、髪を整え、身支度を完了、そして整えたご主人様が食堂へいらつしやります。

「ご主人様、今日は何します?」

「あまり地下壕に籠っていると頭がおかしくて、キノコか緑ゴケになりそうだからそうだなあ……空でも飛ぼうか」

「ごっつ、ご主人様!空を飛ぶなんて正気で言っているんですか?」

「あ、魔法とかでも空を飛べたりしないんだね。まあ、ちよつとした道具を使って空を飛ぶんだよ」

「「すごいですー!ご主人様!」」

朝食をおえ久しぶりに私たちは山の外の麓にできました。

ご主人様が作るという「ひこうき」というものは森の中では使うことができないということなので、車を走らせて草原まで移動することとなりました。

「よし、じゃあ作るよ。……セスナ!」

すると目前に今日まで見たことのない物質が出現しました。材質はさつきまで乗っていた自動車と似ているのですが。



「ここから乗るんだ、乗って乗って！」

ご主人様にいわれ私たち三人はその物質の中に乗り込みます。

ご主人様がタンクにガソリンのようなものを入れたのち、ご主人様も乗り込みました。

すると次の瞬間、とてつもないスピードで期待が動き、すぐにそれが浮き上がりしました。

「うぁーうぁー」

臆病なルームが悲鳴を上げ発狂し始めます。するとご主人様は、

「あれ、ルーム。ちよつと怖かったかな？俺はハワイで飛行機の操縦をしていたから全く怖がることはないよ」

「よくわかりませんが、ご主人様が操縦するなら安心です」

しばらくの遊覧飛行を終え、外でご飯をピクニックで食べて一日が終わりました。

※・※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

私は、アンドロイドであり機械でできています。人工知能を持っています。そのため私にはその機会を動かす源動力が必要です。なので私は毎晩ご主人様にガソリンを入れてもらいます。

「ご主人様、今日の飛行機とても楽しかったです」

「お、それは良かった。また一緒に空の遊覧飛行をしようか。ほいロイド、座って」

優しいご主人様はいつもひざの先端に座らせてくれてご主人様のぬくもりを全身で触れることができます。

あまり大きい声では言えませんがそれは私の特権であり特許であり権利であります。ほかの二人にはちよつと申し訳ないと思つています。

「準備ができたら王様をまた奪還する。その時はまたよろしくね」

「はい、ご主人様。私の体はご主人様が私を作り上げた時からご主人様のものです」

ガソリンを入れていただいた後は自室に戻り眠りにつきます。

ご主人様の夢を見られたらどんなに幸せなことでしょうか。

## ルームの本心

異世界に転移してはや一年。メイドたちとの生活にも慣れを感じてきて日常と化してきた。

そんなごく普通の一般的ないつもの日常の出来事であった。

「それじゃあ、ロイド。おやすみ」

「お休みなさいませ、ご主人様」

いつも通りロイドにガソリンを入れ終えおやすみなさいを言われる普通の日だった。

「さーて今日はもう寝るか」

すると、自室のドアがノックの音を出した。

「失礼します、ルームです」

こんな時間にルームが来るなんてとてつもなく珍しい。

「あれ、ルームどうかしたの？」

「ちよつとご主人様に話したいことがあります」

ルームが珍しく険しい表情をしていたので驚いたので話を聞くことにした。

「私は、ご主人様のことが好きです。愛しています。大切に。ご主人様がいなくなっ

た世界なんて考えられません。ご主人様。私が考えていることはいつもご主人様のことばかりです。ご主人様は私の英雄なんです。ご主人様は私のもう、どうしようもない人生を変えてくれました。ご主人様の存在がなければ今この時点で私が存在しているかどうかすらも定かではありません。でもご主人様は私を救ってくれました。ご主人様。あなたは、私にとってどれほど偉大で越えられない存在で尊敬に値する存在かどうかかわっているんですか？ もちろんわかっているということは私にもわかります。でも私はご主人様に言いたいことがあるのです。さて、本題に入ります。王座奪還の件ですがなぜそこまで実行にこだわるのですか？ もちろんご主人様にとってそれが悲願であるということは重々承知しています。しかし、リスクのほうが多いのです。私はご主人様が王座奪還に失敗する姿なんて見たくないんです。でもご主人様。一応言うっておきますがご主人様が失敗するとはあまり考えていません。でも前回ご主人様は王にやとわれたルフ・ベルファに殺されています。私はもう一度ご主人様が第三者に殺害されることが恐怖なんです。恐怖で仕方ないんです。ご主人様、私はそろそろご主人様が王座奪還をしようとしていることくらいわかっています。でも怖いんです。本当に怖いんです。ご主人様がいなくなつた世界がもしかしたら訪れるのかもしれないと思うと最近は何も眠れなくなっています。なのでご主人様。わたくし目がこんなこと言うのは大変失礼ではならないことだとはわかっています。だとしても私は言い

たいのです。ご主人様、私は今の生活で十分に幸せです。王座奪還をしないという選択はないのですか？」

ルームは珍しく泣きながら今までため込んでいた感情を吐き出したのであった。

## ルームの秘めた心

ひくひくと泣き出すルーム。彼女の姿は、ひどく感情的で、エモーショナルで、見ていられなかったので胸で抱いたのでルームのぬくもりを感じた。

俺はルームにとてつもない心配事をかけてしまったのだ。それは罪深く、やってはならないことであつたと今になって気づいた。

遅すぎる。そんなんじや遅すぎるんだ。何やってたんだ俺は。

俺は、俺がここまで気づかなかつた自分自身に深い後悔感を覚える。

「ルーム。大丈夫だ。俺を誰だと思つてる。俺は今までみんなと一緒に暮らしてきた桜柳咲蘭だ。ルーム、ペンシル、あとロイドを守るのは俺の仕事だ。だから、君たちを置き去りにして死ぬなんてことはもうしない。僕は王になってみんなを幸せにしたんだ。4人で幸せに暮らす以上の幸せなんて俺には存在しない。だから俺は王になって一生の幸せを手に入れるんだ。ルーム。ルームはいつも俺のことを応援して、心配してくれてありがとう。ルームはとてもやさしいね。ああ。とてもやさしいとも。ルーム。俺はその応援にこたえて王になるよ。絶対に失敗はしない。失敗などありえない。失敗など存在しない。」

「ご、ごしゅつ、ご主人様」

ルームは俺のことをぎゅつと抱きしめた。

もちろん俺も抱きしめた。

「やはりご主人様はご主人様です。ご主人様は最強です。ご主人様は神がかつています」

「ああ」

ルームの髪をなでる。するとルームの顔は赤面した。

「ご主人様はすぐにこうやって。…やさしいです。ご主人様」

「ありがとう」

「そうそう、ご主人様。あと一つ話があるのですが……」

「どうしたんだい？」

「そのおーつ。ご主人様。いや、その。嫉妬ってわけではないんですけど……」

「どうしたの？」

「いやですね、ロイドはいつもご主人様のぬくもりを感じられていいなとちよつとした不平不満を言ってみたり……」

たしかに、ロイドは毎晩俺の部屋にきているので、ペンシルやルームよりも接する回数が多くなっているような気がする。確かに、考慮が足りなかったかもしれない。確か

に、それは避けなければならないことであつた。

「確かにそうだったね。…そうだルーム。どうすればいいかな？」

「ご主人様と一緒にデートをしたいです。二人つきりで」

「そ、そんなんでよかつたの。わかつた。じゃあ久しぶりに王都にいつて買い物でもしてこようか」

「うれしいです！ご主人様」

二人つきりでの行動。ペンシルとしたつきりであつたので、久しぶりだったので楽しみだ。

※・※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「それじゃあ、ペンシル、ロイド。この隠れ家の場所のことは頼んだよ」

「承知しました。ご主人様。私たちが責任もつてこの場所を保護します」

二人のメイドは寸分の狂いもなく正確にずれもなく同時に話した。

「ご主人様、ぜひ楽しんでいってくださいね」と、ペンシル。

「ご主人様、お土産を期待しています」と、ロイド。

「ああ。もちろん」

隠れ家を出ると、風がざああつと木々をざわめかせ、地面にはいつくばっている虫たちが演奏を始める。



これから俺とルームは王都に行つて買い物を楽しむことにした。一応王都の偵察もかねて。

## メイド・ウィズ・メイド喫茶

「ご主人様！王都にはメイドさんがいるメイド喫茶があるらしいんですよ。もしよかつたら行きませんか？」

ルームはぜひぜひといたそうな表情で言った。

メイド喫茶か。普段から、ペンシルとロイドとルームがメイド服をきているので、あまり新鮮味を感じないものだが、しかしながら、この世界にもメイド喫茶なる場所があることが驚きだ。

「メイド喫茶か。僕がもともといた世界にもそういう店があつたけどこつちの世界にも需要があるんだね」

「はい。メイドは金持ちの貴族しか雇えないので、それにあこがれている人が多いので、多くの人がメイド喫茶に遊びに行きます。メイドさんはみんなのあこがれですからね」

メイドへのあこがれ。二次元の作品に興味をもつたひとにはそれを持っている人が多いであろう。こちらの世界のメイド喫茶というものがどのようなものが良くわからないが非常に興味がある。

「なるほどねえ。どんな店か興味があるね」

「じゃあいきましよう。私も何か学べるものがあるかもしれないね」

「もちろんだけど、君たちに不満があるわけじゃないよ」

「さすがはご主人様です。わかってますよ」

そういつて、ルームは胸をなでおろした。

ルームに連れられてたどり着いた店「メイド喫茶パーラー・シユバルツドレス」に到着した。西歐風の本でできた扉にガラスがくつついていて非常に高級そうなつくりで、非常におしゃれな感じがする。そしてドアを開けると、

「おかえりなさいませ、ご主人様、姫様」

茶色のメイド服を着たメイドさんは俺とルームを見てそういつた。

ただ、ルームがメイド服を着ているからか少し、ほんの少しだけ微妙な間があつた。まあそれも仕方のないことであろう。

「ご注文はいかがになりますか？」

メニューを見ると、紅茶とか、ケーキやオムライスのようなもの、スパゲッティのようなものがあつた。

この世界の料理は、俺がいた世界のものとはとてもかけ離れていたもので、あまり食べたことがなかつたのであつたがせっかくなので注文をお願いすることにした。

「ええーと、ダーズリンティーと、ウロポロス卵のオムライスください」

「承知しました。ご主人様」

ウロボロス卵というものが良くわからなかったが、オムライスということなのでおいしいのであろう。

「ご主人様は意外と庶民的なものが好きなんですね。隠れ家にいるときは見たこともないとしてつもなくおいしい料理ばかりお召し上がりになられているのでちよつとびっくりです」

ウロボロス卵というものはそんなに庶民的なものだろうか。名前だけで見ると結構高貴そうな感じがするものであるが。

「こっちの世界の料理は全然知らないんだ」

「そういえばご主人様はこっちの世界の料理を食べているのを見たことがありませんでしたね。知っているものは紅茶くらいでした」

確かにこの世界と元の世界で共通している飲食物は紅茶くらいであった。なぜ、紅茶だけ同じなのだろうか。

「お待たせいたしました。利き手はどちらですか？」

「右です」

「私は左です」

するとメイドさんは利き手に合わせてカップとスプーンを置き、紅茶を注いだ。この

紅茶の注ぎ方はペンシルのものと同じように非常に紅茶に詳しいといった凄みのあるものであった。

「うん。おいしいねルーム」

「はい。隠れ家以外で飲む紅茶もなかなかおいしいです」

しばらくすると、ウロボロス卵のオムライスが運ばれてきた。

見た目は普通の卵で作った鶏卵のオムライスと同じような黄色でふんわりとした空気感があり非常においしそうであった。

「ご主人様！見てくださいこれ。メイドさんの絵が描かれていますよ」

オムライスにはソースで書かれたメイドさんの絵が描かれていた。

非常に手が込んでいるものであるということが良くわかる。

「ウロボロス卵もやっぱりよさがありますねえ」

ルームは懐かしいといわんばかりの表情でオムライスをほおぼるのであった。

ルームのおいしそうに食べる表情を見ながら、そのオムライスを食べたが、鶏卵のものとは違い少しだけたんぱくな感じの味であり癖になるような味であった。

「おいしいね。こっちの世界の食べ物をちよつと拒否していた部分があったけどもったいないことをしていたかな」

「でもご主人様が教えてくださる料理は最高です！」

そして、  
ルームとしばらくこの喫茶店で過ごすのであった。

## ルームとのデート 誰も忍び寄らない

「ご主人様、せっかく王都に来たんですし、お土産でも探しに行きませんか？」

ルームはデザートとして注文した、ケーキのようなものを食べながらはなした。

「そうだな。ペンシルとロイドも屋敷で寂しそうにしているだろうしね」

このメイド喫茶から歩いて10分程度の場所に市場のようなものがあり、そこでお土産を探して、購入することができるといふ。

メイド喫茶にメイドと一緒にいるので、周りの目線から痛みを感じるようになったので、あと、冷たい視線も感じたので、メイド喫茶を後にすることにした。

「ご主人様。ごちそうさまですー！」

メイド喫茶の周辺の町並みは、最初に連れてこられた駅前集落と違いおしゃやかな漢字がする。

最初に連れてこられた駅前の町の道路は、舗装すらされておらず、砂埃が舞っていた。しかし、さすがは王都。石畳でおしゃれな舗装が施されているので非常に清潔な感じがする。

「さすがは王都だね。最初にこっちの世界に来た時はとんでもないところに来たと思っ

たんだけど。さすがは王都だからしっかりしているね」

「はい。まあでもおしやれなのは王都だけなんですけどね。周りを見てもわかる通り、砂漠の真ん中に人工的に作られたこの街は、王様の権力の高さをしめすために、周りの都市整備を犠牲にしてまでも犠牲にして作られた街なんです」

この国の王の噂を聞くとどうもこんなひどい噂ばかり聞こえてくるものだ。権力のためにその国の首都だけをきれいに保たせるというものは、以前いた世界の独裁国家がするような手法だ。やれやれ、どの世界も独裁者ろくでなしのやることは似たようなことしかないものだ。

「ご主人様、その角を曲がると市場があります」

市場には、今まで一度も見たことないような不気味な食材が並んでいた。そういうえば、初めてこの世界に来た時には、ペンシルが非常に不気味な料理を提供しようとしていたことを思い出した。

でもなんか前の世界にいた感じがするな。砂糖マシマシませそばってペンシルの冗談じゃなくて本当に存在していたとは。でもなんでませそばなんてものがこの世界で食されているんだ。まあ、自分が住んでいた世界が進んでいるって決めつけるのは良くないとしても若干の不自然を覚えるものだ。

「砂糖マシマシませそばはこの王都の名物の料理ですよ。王様が発案したメニューで



す」

「王様が考えたメニューねえ……」

あやしい。あやしすぎる。こんな前の世界のような料理を王様が提案するとは。王の名前がなんであつたか忘れてしまつたが、あの時ルーフ・ベルファはこの世界の住人のつぽい名前前で呼んでたと思うんだがなあ。まあ、西洋人つぽい名前つてだけで僕みたいな日本人のような名前じゃないからつて異世界人つて決めつけるのも早計かもしれないが……。

「ご主人様、この服ペンシルさんに似合うと思いません？」

ルームはゴシックロリータと表現すれば良いのかよくわからないが、黒を基調としてヒラヒラしたものがたくさんくつついてる服に指をさした。

「似合うかもしれないね。じゃあこれをペンシルのお土産にしよう！」

「ロイドさんのお土産はどうしましょうねえ」

「そうだねえ。あ、このネックレスなんてどうだろう」

「素敵です！さすがはご主人様です。ロイドさんにとても似合っていると思います。センスが違いますね」

市場で目に付いたものを購入しつつ、市場にある店を一回りしたので、日が暮れてきたので隠れ家に帰ることとした。するとルームは、

「ご主人様、なんだか私はご主人様を独占しようなんて思ったことが間違えだったかもしれません。ご主人様は私たち三人を平等に愛してくれているっていうことがよくわかりました。ご主人様、これからもこんな私ですが宜しくお願いします！」

「ああ」

ルームと共に車に乗り込み、隠れ家に到着した。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……………どうなってるんだ？」

## 隠れ家のメイドたち

それは、隠れ家を留守中に行っているときの出来事であった。

「ご主人様がいなくなるとちよつと寂しいですね」

桜柳咲蘭が見えなくなるまで深々とお辞儀をしていたペンシルがロイドに言った。

「そうですね。ご主人様がいけない生活なんて考えてもみませんでしたから。半日でもご主人様がいけないというものは恐怖といいましょるか、なんだか心が落ち着きませんね」

ロイドは人間と同等もしくは、そこらの無感情な人間よりも感情があるのかもしれない。

「そういえばロイドって趣味とかあるんですか？」

「趣味ですか……。そうですね、ご主人様をずっと眺めていることでしょうか」

「左様でございますか」

ご主人様は、ロイドを作るときどのようなことを考えていたのかと疑問を抱き苦虫を噛み潰したような表情をするペンシル。

「私がこの屋敷に来る前によくやっていたんですけどね……」

ペンシルはおもむろにメイド服のスカートのポケットから金色のカギを取り出した。「なんですかそれ?」

「この鍵は私がご主人様のメイドになるときにまとめた荷物を入れるために使ったトランクのカギです」

ペンシルの自室からトランクを取り出しカギを開けるペンシル。

するとそのトランクの中から将棋盤を取り出した。

「なんですかそれ。ゲームみたいに見えますけど」

「これは、私が鉄道会社に勤務していた時にとあるお客さんからいただいたもので、将棋というんですよ」

「しよぎ……どうやって遊ぶんですか?」

「ルールに従って相手の王を取るんです」

するとペンシルは紙と万年筆とインクが入っている瓶を取り出してルールをロイドに説明した。

「なるほど!それは面白そうですね」

「ただですね、ただの勝負じゃつまらないじゃないですか。なので何かを賭けましょうよ」

「そうですね。それでは、負けたほうが相手の言うことを聞くというのはどうでしょう」

か」

「おもしろそうですね」

そして、ペンシルとロイドは将棋の勝負を始めた。

「むむむむむ、その手を使ってくるとは」

「相手の駒を取ってそれを戦力にする。それを使いこなせばなかなか楽しいですね」

「まるでどこかの王みたいですね」

「あんな低俗な存在と同等にしないでいただきたい」

二人の間から熱意のようなものを感じるようになってきた。

「そうだ、こいつを取れば！」

ペンシルその一手が引き金となり、戦況が逆転することになった。

「むむむむむむむむむ、参りました。ペンシルさん」

「それじゃあ、ロイドさん。ご主人様が喜びそうな服を作ってそれを着て下さい」

「さすがはペンシルさんです。常にご主人様が喜びそうなことを考えているんですね」

「それはもちろんです。私の心と体はあの日からご主人様のものですから」

ペンシルは将棋盤をトランクにしまうと、小さな紙がトランクに挟まっているのを見かけそれを手に取って見るとハッと驚いた顔をしたと思ったら髪を握りつぶしてポ

ケツトにしまったのであった。

## お土産

「すごいねロイド！どうしたのその服装は？」

「少しいろいろありまして……」

頬を赤らめるロイド。それはまるで夕日が燃えているような赤さだった。

「とつともにあつてるよロイド」

いつもは白黒のロングスカートのメイド服を着ていたロイドであつたがなぜか、白いドレスを着ていた。

「ご主人様に気に入っていただき私はとても幸せです。ペンシルさんこれでいいでしょう？」

「そうですね。ご主人様がより幸せになつて頂き。私はとても幸せです」

するとペンシルは、俺の腕によりかかり頬を腕にくつつけるのであつたのでペンシルのぬくもりを感じた。

「そうだ、今日はお土産を買ってきたんだよ」

「本当ですか！」

二人はともうれしそうな表情で言った。

「じゃあまずはロイド。いやーこんなに立派な服を着ていてくれてとてもよかったよ。ロイドにはこのネックレスを差し上げますよ」

「素敵です！いいんですか私がいこんなにきれいなものをもらって……」  
「もちろんだよ」

ロイドの首に、とても大きなダイヤモンドがついたネックレスをつけてあげた。

ロイドが来ているドレスと色調のバランスがあつているのでとても素敵に見えた。  
「すごいです！ご主人様。やっぱりご主人様のセンスは最高ですね」

ルームは俺のセンスをほめてくれた。そう、率直に言われるとちよつと照れ臭くなつてしまう。

「もちろんペンシルにもお土産を買ってきたよ！」

「三人を平等に愛してくださるご主人様は素敵です……」

「この服なんだけど……気に入ってくれるかな」

「こ、これは！私が以前ほしかったものです！」

「おつ、そうだったんだ！イヤーペンシルなら好きそうかなって思ってたね」

「ありがとうございます！います！いま着てみてもいいですか？」

「もちろんだよ」

ペンシルが服を着替える。すると、





・  
「

すると、

「  
・  
|  
・  
」

ノイズ交じりであるがRという意味の信号が聞こえてきた。

## 砂糖マシマシませそば

ここ最近、僕が通っている学校の生徒が失踪している事件が多く起きています。

失踪事件の最初の失踪者となった人は、「桜柳咲蘭」だ。彼は、トラックにひかれそうな女子を助けるために、助けたのち、なぜか行方不明となったらしい。その桜柳に助けられた女性の記憶はあいまいで、支離滅裂なことしか言わないので、桜柳が彼女を助けたのちどうなったかが全く分かっていないのだ。トラックに轢かれて死んでしまったとしても、その遺体がどこにも見当たらないので、「失踪」したことになっている。

そして、その「桜柳咲蘭」の友達である、ルーフ・ベルファは彼の行方を捜している最中に行方不明になった。聞くところによると、とある児童公園で彼の姿を見たという証言がある。

「うーん。この展開！絶対になんかの力が働いているに違いない！」

桜柳とルーフ・ベルファと同じ高校に通う俺、「坂城琢真」さかきたくまはこの事件について解決したいと考えている。

そのため、放課後になると、僕は文芸部員なので、文芸部にあるコンピュータをインターネットに接続して、掲示板などで情報をあさっている。

……のであるが、その二人の情報が全くといってよいほど出てこないのだ。

どうにかしてその二人にもう一度会いたいと考えているので、この町の周辺での不思議な出来事をあさっているのである。

「なんか、不思議なことないかなー」

このようなことを考えていると、部室のドアを開けた一人の女子生徒が入ってきた。

彼女はこの文芸部の後輩である「霧ヶ峰」である。

「先輩先輩、聞いてくださいよー」

「どうしたんだ？」

「今日弁当を忘れてしまつて学食で昼食を済ませようと思つたんですけど食券がなぜか売り切れていたんですよ。いつもは販売終了時刻ギリギリになつても売り切れる心配がないのに、今日に限つてHR前の時間にもかかわらず売り切れていて。私はもうおなかがすいてしまいましたよ」

霧ヶ峰は、僕に何かをおごつてくれと言わんばかりの表情で見つめてくる。

彼女は僕をATMか何かと勘違いしているのだからか。しかし、彼女がどうしてもかわいそうに見えてきたため、僕が優しいので、ごちそうすることにした。

「たく仕方ないな」

「あ、ご馳走してくれるんですか！さすがは坂本先輩！優しいです。高校の近くの公園

の隣に、おいしいラーメン屋さんあるんですよ。そこ行きませんか？」  
「らーめんか。いいよ安いし。」

ということなので、僕と霧ヶ峰はラーメン屋に行くことになった。

ラーメン屋のメニューを見ると、家系ラーメン、中華そば、まぜそばとどこにでもあるようなメニューであると思つたがなんと、裏メニューとして「砂糖マシマシまぜそば」と書かれている紙が堂々と壁に貼り付けられていた。裏メニューをうたっているのもかかわらずこんなに目立たせるのはいかなるものであろうか。

「先輩……この砂糖マシマシまぜそばおいしいんですよ」

「まぜそばに砂糖って正気なのか？」

「えっ？先輩食べたことないんですか？おいしいんですよ」

怪しい、非常に怪しい。なんでまたまぜそばに砂糖なんて入れるんだ。普通の味覚を持つていればそんな考えは思い浮かばないと思うのであるが。

「そうですね。でも先輩、甘いものに砂糖をかけることつてあるでしょう？スイカに塩を振りかけたり、醤油に砂糖を溶かして餅につけて食べたり。つてことでまぜそばもおいしいですよ」

「どんな理屈だよ」

ということ、砂糖マシマシまぜそばを注文した。

「そういえば、隣の公園だよな。ルーフ・ベルファがいなくなった場所って」

「そうですねえ。この公園ですねえ。嫌な思い出があります」

「嫌な思い出ってどんな？」

「知りたいです？」

彼女の視線は、上目遣いの視線であった。

「ああ」

「じゃあこのまぜそばを食べ終わったら……」

ということなので、まぜそばを食べたが味はもちろん。まずかった。

「いやーおいしかったですね。じゃあ、嫌な思い出について。」

霧ヶ峰が少し微笑んだ。すると俺は体全体に電流のようなものが働き、意識がなくなってしまう。

## DE

「……先輩、そろそろ起きてくださいよ」

遠い意識の中かすかに、先輩「霧ヶ峰」の声が聞こえる。

自分の記憶が正しければ、まぜそばを食べている最中電流が走り気絶していたのだが。

ついに意識が戻ったのであろうか。

目を開けてみると、視界に先輩の蔑むような眼が視界に入った。

「先輩、そろそろ足がしびれてしまうので起きてほしいのですが」

「え？あつ！申し訳ない」

無意識のうちに先輩の膝枕で寝ていたらしい。

「(ハハ)は(ゴハ)だい？」

眼前にはお湯が沸いているやかんとその下にあるストープ、そしてポロポロのベンチが見えた。どうやらここは、駅舎のようだ。一日に3本しかない列車の時刻が書かれている時刻表がある。改札の隣にはさび付いたシャッターにより閉ざされた窓口のようなものがある。ここは無人駅になってしまった駅なのであろう。

「ここは……そうですね、わかりやすい表現で言えば異世界に通じる列車へ乗車するための駅です」

「は？」

後輩が言っている内容が自分には理解できなかった。

異世界に通じる列車ってなんなんだ？

「それは、私の口から言うことはできません。しかし、先輩が元居た世界とは違う世界に行くことになっています。あなたの制服の内ポケットには切符が入っているでしょう？」

後輩の言う通り制服の内ポケットには乗車券が入っていた。本当に異世界に行くことになってるらしい。

「なんでまた僕なんかが異世界に？」

「あなたが必要だからです」

「僕が必要だ？」

全く意味が分からない。なぜ僕が必要なんだ。僕の代わりなんていくらでもいるのではないか。僕は、どこにでもいるようなごく普通の一般男子の高校生だ。

「とにかく行けばわかります。私についてきてください」

「そうか」



霧ヶ峰についていくと0番線と書かれたプラットホームへ連れていかれた。

空には真つ白な雲がどんよりと広がっていて青空は見えない。雲量10といったところだ。

ここはターミナル駅のようなのでこの駅でレールは途絶えている。

周囲は山に囲まれていて、駅を出るとすぐにトンネルに入るといった構造になっている。

「あとどれくらいで列車が来るんだ？」

「もうすぐきますよ」

するとトンネルの中から赤いディーゼル機関車が見えてきた。

4両編成のブドウ色の客車はホームに停車した。すると、ディーゼル機関車は客車と切り離し、機回し線に入り列車の先頭に機関車を付け替えた。

「乗りますよ」

後輩は、客車の扉を開けて車内に乗り込んだ。

「あ、この客車自動扉じゃないのか」

旧型客車の本来の運用をしている本当に昔ながらの列車だ。走行中にも扉を開けられるまさに旧型客車というものだ。

青色のモケットが張られたボックスシートが整然と並んだ車内。霧ヶ峰は、真ん中あ

たりの席におもむろに腰かけたので自分は向かい合わせの席に座った。

「もう少し段階を踏もうとは思っていたのですがいきなりになってしまいました。すみません」

霧ヶ峰は、申し訳なさそうな顔をする。

「いや、別に……事情があるんだろう」

こつちにはいろいろ聞きたいことがある。こいつの機嫌を損ねると話ができなくなってしまう可能性があるのも慎重にいかなければならぬ。

機関車が汽笛を鳴らすと列車はガチャリと音を立てて動き出した。

## 星空

後輩と僕を乗せた列車は、トンネルに入り10分ほど経過した。

ガタゴトと短いレールをゆつくりと一定のリズムで刻んでいるその音は、僕と霧ヶ峰の間に流れる空気を重くしている。

——なかなか言い出せない

なぜ自分は、異世界に行かなければならないのか。なぜ僕が必要とされているのか。それが全くわからないのだ。

霧ヶ峰は車窓をじつと冷たい視線で眺めているので、余計に話しかけにくい。そう思ったその時であった。

「先輩って、中学のとき何を趣味にしていましたか？」

突然の子の一言に少し驚きを隠せずにいる自分がいた。

「趣味カーッ。趣味と言えるかどうかわからないけど、LINEのグループで友人同士で小説を書いていたことがあったなあ」

中学の頃、仲が良かった友人。そう、ルーフ・ベルファと桜柳咲蘭と一緒に小説を書いている、批評し合っていたものだ。

「先輩が小説ですか……いえ、何でもありませんがその……先輩が小説って意外ですね」  
ところどころ笑いを隠しながら言う霧ヶ峰。さっきまでの、重苦しい空気が少し、ほんの少しながら和らいだのがわかった。

「ルーフ・ベルファは、いわゆる、戦闘ものって言えばいいのかな。ラノベっぽい作品をよく書いていたよ。桜柳錯乱は、異世界に転生して、メイドさんとイチヤイチャするよ  
うな話を書いていたね」

すると霧ヶ峰は、

「なんか本当に中学生って感じですねえ。ちなみに先輩はどんなものを書いていたんですか？」

「それは内緒」

自分が描いた小説の内容は、非常に恥ずかしいので、あまり人には言いたくない。本当にあの頃の自分はどうかしていたのだ。ああ早く忘れたい。

「他人の黒歴史をばらして、自分のことは隠すなんて、本当に先輩らしいですね」

「うるさい」

そうこうしているうちに、列車はトンネルを抜けた。

「うわあナンダコレハ！」

車窓には、一面に星空が広がっていて、まるで宇宙空間にいるかのようなようであった。す

ると霧ヶ峰はこういった。

「この世界はあなたの……そうですね、夢と現実の狭間にある空間です」

「はい？」

僕は霧ヶ峰が入っていることが、何を言っているのかさっぱりわからなかった。

「今から私達が向かう世界は、先輩の記憶の中に確実に存在した記憶をもとにして作られた世界なのです。なので、夢と現実の狭間である、このような空間を経由する必要があります。異世界に行くことができる人物は、先輩が元いた世界の元住人三人です。その三人により、これから向かう世界は作られたものなのです。つまり、私達がこれから行く世界は、その三人により未来が左右されるのです。これから私達が行く世界は非常に不安定で、もろく、デリケートな場所です。その世界の未来をささえ、正しい方向に持つて行かせるためにも、先輩を初めとした三人の協力が不可欠であったのです。しかし、一人目は頭のネジが一本。いいえ、すべて狂い、ゆるみまくっているような人で、全く当てになりませんでした。それとあまり思い出したくないのですが……いいえ、この話は後におきます。さて、もう一人はですね、欲望が強すぎて、正義感の方向が狂っているといまじょうか、盲目的な人なんでしょうかね。まあとにかくおかしいんです。そのようなことなので、残りの一人である先輩の力が必要です。」

霧ヶ峰は、原稿用紙一枚を軽く超過するかの勢いの分量で、今自分が置かれている状

況を説明してくれたのであったが、

「ごめん、全く理解できなかった」

「……まあ、先輩ですし、そのようなものだと思ってましたよ」

「悪かったな」

「……とりあえず、この列車を乗り換える必要がありますので降りる支度をしてください」

そういうことなので、列車を降りる準備をしていると、列車は星空空間の中の駅に停車した。

するとホームの向かい側には、青い客車と蒸気機関車が停車した。

先輩の事は信頼していますが、上段に上つたら蹴落としますよ

客車の入り口には星のマークが3つ記されていた。

S L がけん引する寝台列車というものもなかなか趣があるものだと感じていると霧ヶ峰は、

「この寝台列車に乗って、桜柳咲蘭がいる世界に行きます。11時間程度の長い旅になります。寝台列車ですので快適に移動できると思いますよ。」

11時間か長いな。現在の時刻を駅のプラットフォームの時計で確認してみると、午後9時半を示していた。

「30分後に出発しますので買い物でもしましょうか」

霧ヶ峰に案内されたので、駅舎の売店へと案内された。

するとそこには、マヨネーズクッキー、ゴキブリの素揚げ、ミルワームの岩塩焼き、砂糖マシマシ油そば、チョコレート焼きそばパン、ショートケーキカップラーメンといったわけのわからないものが置いてあった。

「おい、この世界の食事はどうなってるんだ？」

「ひどいですよねこれ。まあ砂糖マシマシ油そばはおいしいからいいんですけど」

そんなに砂糖マシマシ油そばが好きなのか霧ヶ峰は。僕にはその感覚を理解することがあまりできない。メニューに絶望していたのであるが、店の隅っこの冷蔵庫の中に牛タン弁当があったのでそれを購入することにした。

「牛タン弁当もなかなかおいしいですよね」

霧ヶ峰にもマトモな味覚を持っていたようで安心する。

なんだかんだで30分があつという間に過ぎ、ベルがホーム上に鳴り響いたので列車の車内に入ることにした。車内には古い客車特有の独特な消毒液のにおいが漂っていた。

そして僕たちは、2段ベツトがある個室で寝ることになったのであった。霧ヶ峰が上段で僕は下段だ。

「なんか昔の列車って感じがするね。どうしてこんなに、その、僕の趣味にマッチしているような鉄道が走っているんだ？」

「さあなんででしょうね」

霧ヶ峰はその理由を聞くなといわんばかりの笑顔で答えるのであった。

この世界はいつたいどうなっているのやら。





のなんて何一つありませんね」

ペンシルが赤面を紅潮させながら言った。

「もう今回はみんなを危険な目には絶対に会わせないよ」

そういうことなので、ルームとペンシルあとロイドにスマートフォンを作って渡した。

「これは俺が以前暮らしていた世界で広く普及していたスマートフォンというものなんだ。こいつを持って異世界に転生した人は高確率で王またはそれに準じた、もしくはそれ以上の地位に着くっていうとてつもない実績があるシロモノなんだ。こいつがあれば絶対安心さ。」

「すごいです！ 私たちの王さま、ご主人様！」

スマートフォンは異世界では欠かせないアイテムとなりつつある。ということなのでミツマタを使ってスマートフォンを作ってみたのであるがここで問題点が生じた。電波がないのだ。以前ペンシルに渡したトランシーバーは基地局を必要としないものなのであるがスマートフォンは基地局を必要とするのだ。したがって、スマートフォンを今の時点ではまともに利用することができない。

ということなので、基地局の代替品となる移動基地局車も作り上げることにした。

「ご主人様、なんですかこれは。前回ご主人様が作ってくださいった自動車に似ています

けど」

大型トラックの移動基地局車を見上げながらルームは俺に質問した。

「これは、さつき渡したスマートフォンを使えるようにするために必要な自動車なんだ」  
「なるほど！さすがは主人様です」

そして、俺と三人のメイドは移動基地局車に乗車して王都に出撃することとした。

## 王座奪還前夜祭

(坂城SIDE)

ガタゴトと音を鳴らしながら列車がゆらゆら揺れている。僕たちが乗車しているのは電車ではなくて客車なので、車内にはモーターの音は聞こえてこない代わりに、鉄の車輪と鉄のレールがぶつかり合う音が静かに響き渡っている。

これから、どんな世界にかされるのかという不安にオロオロしているので寝付けな  
い。なので、冗談にいる霧ヶ峰にでも話しかけようと冗談に行くためのはしごに足をか  
けたが寝る前の一言を思い出したので躊躇することとした。

「先輩、全部見えてますよ」

まずいところを見られてしまった。

「さすがに先輩が、そういうことをする人だとは思ってましたけど思ってませんでしたよ」

何言っているかわからないが、褒められているわけではないだろう。

「あの、その、これは、あなたに手を出そうとしたんじゃないからね、その……」

霧ヶ峰は、ため息をつき、

「上にながらないでくださいといった理由は、それではなかったんですが一応。先輩はそういうことを考えていたんですね」

「つてそういうことじゃなかったの？」

霧ヶ峰は鼻で笑っているのがわかった。どうやら僕はカマをかけられたみたいだ。

「冗談ですよ。先輩がそんなことする度胸がないことくらいわかってますつて。それで、どうかなさったんですか？」

霧ヶ峰が起こつていなかったように胸をなでおろす。

まったく、ヒヤヒヤしてしまうよ。

「そのさ、眠れなくて」

「そうですか、まあ私もそんな感じでしたよ。急に異世界に行くことになってしまいましたからね」

「ん？霧ヶ峰に取つても急だったの？」

「はい。異世界から呼び出しがあったのは急な話でした。私が部室に行く直前の話でしたからね」

それはとても意外だった。霧ヶ峰はずっと前から僕を異世界に行かせることを企んでいたのと思っていたのだがその考えは間違っていたようだ。だとしたら、なぜ霧ヶ峰は異世界から呼び出しをされたのだろうか。

「なんつて言えばいいかな。霧ヶ峰つてその、生まれは以前僕たちがいた世界なの?」  
「はい。私は普通のどこにでもいる学生でした。しかし、ある日を境に普通の学生ではなくなり、現在のように異世界から交信を受けるような身になりました」

「どういう意味?」

全く意味がわからない、異世界から交信を受けるような身つてどういうことだ?

「私が、異世界からの交信を受ける能力を授かったのは1年前のことでした。中学三年生の頃にふと異世界と交信することができるといふ芽生えたんす。最初は何が起こっているのか全くわからず。とても不安でした。異世界自体は小説とかアニメの影響で憧れていたんですけど、実際その異世界が身近になるといふのは不気味なものでしたね」

1年も前からそんな能力を持っていたのか。その不安というものは実際に自分が経験したわけではないのでその具合がよくわからないのであるがとても心理的に負担があったのであろうと察する。

「話は変わるけどどうして文芸部に入ろうと思ったの?」

「それは、その。異世界が身近になったので面白い話を書けるかなと思ひましてね。あと、異世界に興味がある人とかもいるかなつて」

以外と異世界についてまだ好意的な感情を持っているようだった。







僕らに乗せた列車は駅に停車したのでホームに降りることとした。

駅前の街を見てみるとだいぶ埃っぽくごちゃごちゃした街並みでお世辞にも綺麗とは言いがたいものであった。

「ここから歩いて6時間ほどかかる王都まで歩きますよ」

「歩くの？」

「はい」

「6時間？」

「そうですね」

「他に交通手段は」

「もちろんありません」

異世界というんだから車がないとしても馬車とか竜車とかがあってもいいような気がするんだけどこの世界にはないようだ。だいぶ文化レベルが遅れているんだなあ。

ということで僕たちは歩いて王都に向かうこととなった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

一方その頃、桜柳は、王都に到着した。

「僕とペンシルとロイドで王をなんとかするから、ペンシルはこの車の中で異常がないから見張っていてほしい」

「かしこまりました！ご主人様」

ルームは自信満々な表情で答えた。

「警備が甘くなる夜を狙って突撃する。昼間のうちはここから屋敷までの地下通路を作るよ」

「地下通路って、まあご主人様なら簡単に作れますよね。あの隠れ家をつくった時みた  
いに」

「ああ」

そうして三人は掘削機をミツマタで作り、地下通路を掘り始めた。

## 永遠の日々

「ご主人様、自由って何だと思えますか？」

ペンシルは、俺によりかかりながら不思議なことを言った。自由とは何か、そんなこと今まであまり考えてもみななかったものだ。

「どうしたんだいきなり？」

「私思うんです。自由っていうのはつまり、実現できないことを指すと思うんですよね。完璧な自由なんてこの世には存在しない。でも、ご主人様ならその現状を変えて自由を手に入れられることができるのではないかと思うんです」

ペンシルは目にかかる俺の髪をどかして瞳を見ていた。ペンシルの瞳には、自分の顔が映りこんでいる。

「ミツマタはモノを作るだけだからね。モノを作って自由を作るっていうのはなかなか難しいかもしれない。でも、不可能なものではないと思うんだ」

「私もそう思います。ご主人様に不可能なんてないと思います。まあなんとというか、自由を手に入れて私が見たいことを全部できるようになったとしたら、ご主人様と一生とは言わず、永遠に過ごしたいとおもいましたね」



EEEEEEEEとか言っているようなゴミ主人公みたいな人なんだ。僕は、そんなことを言ってもらわなくても、ルーム、ロイド、ペンシルと一緒にいられることがすごくうれしいんだ」

「さすがです、ご主人様！やはりご主人様の考えは素晴らしいです。感動してしまいました」

ルームの瞳からは暖かいものが流れ出ていた。

したがって、それを指ですくい上げた。

「それじゃあ、朝ご飯を食べようか」

今日の朝ご飯は、卵かけご飯と、みそ汁と、イワナ塩焼きといった質素なものであった。

「おいしそうだね」

「新鮮な鶏卵の卵が手に入ったので今日は卵かけご飯にしてみました、たれにこだわったのでおいしいと思うんですが」

今日はペンシルも目覚めが良かったようなので、ペンシルが最初から最後まで料理をしたようだ。

「ご主人様、紅茶はいかがですか？」

「うん。イングリツシユ・ブレックファスト・ティーがいいかな」

「かしこまりましたご主人様」

ロイドはお湯を沸かして紅茶を作り始めた。

「なあ、ペンシル、俺の欠点って何だと思う？」

「ご主人さまに、欠点なんて存在しませんよ」

ペンシルは、当然でしょといわんばかりの表情でささやいた。

「どうなのかねえ」

「だってそうでしょう。ご主人さまはいぜん、らいとのべるといふものをミツマタで作ってくださいりましたが、その本に書いてあるハーレム系の主人公にはとんでもない人間のような人が多いかったですからね。朝起きたとたん胸をもみ始めたり、女の子を脅して無理やり契約させようとしたり、人として終わっている方が多いです。でもご主人様は、そんなことをせずいつも私たちのあこがれの存在でいてくれます。でもでも、ご主人様はどんなことをしても私たちの尊敬の存在です。」

「なんやかんやで朝食が終わり、暇な時間になったので、今日は団子を作ることにした。ご主人様、なんですかこれ？」

もち米と、大麦・小麦・粟・キビ・ヒエ・ソバ・トウモロコシ・小豆・サツマイモ・栃の実を砕いたものをミツマタで作り上げた。

「今日は団子を作ってみようと思うんだ」

「ご主人様、だんごってなんですか」

「うーん。まあ見ればわかるよ。僕がいた世界では胃を鍛えるためにもつかわれたらしいよ」

「さすがはご主人様です。王座奪還できたえなければならぬわたしたちのことを思っているんですね」

団子を丸め、ふかしたのでそれにきな粉とかあんこをつけて3人で食べた。

「おいしいですよご主人様！ やっぱりご主人様が作ってくださいる料理はともおいしいですね」

「ご主人様に拾ってもらって私は幸せです」

「ご主人様！ ありがとうございます」

団子を100個程度食べおなかがいっぱいになったので、ペンシルにガソリンを給油して寝ることにした。

「ご主人様、いつもありがとうございます」

「ペンシルが言ってたんだけど自由って何だと思う？」





EEEEEEEEとか言っているようなゴミ主人公みたいな人なんだ。僕は、そんなことを言ってもらわなくても、ルーム、ロイド、ペンシルと一緒にいられることがすごくうれしいんだ」

「さすがです、ご主人様！やはりご主人様の考えは素晴らしいです。感動してしまいました」

この場面を以前にも見たことあるような気がしたが、ルームの瞳からは暖かいものが流れ出ていた。

したがって、それを指ですくい上げた。

「それじゃあ、朝ご飯を食べようか」

今日の朝ご飯は、卵かけご飯と、みそ汁と、イワナ塩焼きといった質素なものであった。

「おいしそうだね」

「新鮮な鶏卵の卵が手に入ったので今日は卵かけご飯にしてみました、たれにこだわったのでおいしいと思うんですが」

今日はペンシルも目覚めが良かったようなので、ペンシルが最初から最後まで料理をしたようだ。

「ご主人様、紅茶はいかがですか？」

「うん。イングリッシュ・ブレックファスト・ティーがいいかな」

「かしこまりましたご主人様」

ロイドはお湯を沸かして紅茶を作り始めた。

「なあ、ペンシル、俺の欠点って何だと思う？」

「ご主人さまに、欠点なんて存在しませんよ」

ペンシルは、当然でしょといわんばかりの表情でささやいた。

「どうなのかねえ」

「だってそうでしょう。ご主人さまはいぜん、らいとのべるといふものをミツマタで作ってくださいりましたが、その本に書いてあるハーレム系の主人公にはとんでもない人間のような人が多いかったですからね。朝起きたとたん胸をもみ始めたり、女の子を脅して無理やり契約させようとしたり、人として終わっている方が多いです。でもご主人様は、そんなことをせずいつも私たちのあこがれの存在でいてくれます。でもでも、ご主人様はどんなことをしても私たちの尊敬の存在です。」

なんやかんやで朝食が終わり、暇な時間になったので、今日は団子を作ることにした。

「ご主人様、なんですかこれは？」

もち米と、大麦・小麦・粟・キビ・ヒエ・ソバ・トウモロコシ・小豆・サツマイモ・栃の実を砕いたものをミツママで作り上げた。

「今日は団子を作ってみようと思うんだ」

「ご主人様、だんごってなんですか」

「うーん。まあ見ればわかるよ。僕がいた世界では胃を鍛えるためにもつかわれたらしいよ」

「さすがはご主人様です。王座奪還できたえなければならぬわしたちのことを思っているんですね」

団子を丸め、ふかしたのでそれにきな粉とかあんこをつけて3人で食べた。

「おいしいですよご主人様！やっぱりご主人様が作ってくださいる料理はともおいしいですね」

「ご主人様に拾ってもらって私は幸せです」

「ご主人様！ありがとうございます」

団子を100個程度食べおなががいっぱいになったので、ペンシルにガソリンを給油して寝ることにした。

何かがおかしい。そう思い始めた。

今日の出来事は以前もみたことがある。

「もしかして」

廊下に出て目の前にあるペンシルの部屋に入った。

「ご主人様、私のところに来てくださったんですね。私はこの日をずっと楽しみにしてきました」

「いや、そうではない。ペンシルまさかとは思ってたが、俺の記憶を操作してないか」

ペンシルはハッと驚いた顔をした。

「どうしてこのことに気づいたんですの？」

「君は以前、自由とは永遠に一緒に暮らすことって言ったよね」

「はい、私にとつての自由とはご主人様と一緒に、永遠に過ごすことだったんです」

「そうだったんだな。ペンシル。お前のやさしさはじゆうぶんによくわかった。でも俺は君と新しい思い出を作りたいんだ。だから、新しい明日を迎えたい」

「わかりました、ご主人様。やはりご主人様にはかないません」

そして、今まで見たことがない朝を迎えることができた。

あとがき↓ここまで読んでくれてありがとうございます。ぜひ、最終回までお付き

合  
い  
く  
だ  
さ  
い  
。

## 最終章のカタストロフィーな結末を迎えた終演

とうとう戦争の火種が始まった。

異世界での王座はく奪の火。

それが今日行われる。

待ちに待った今日という日の夕方。黄昏の風を一身に浴びながらその時は来る。

この世界の王になり俺、桜柳はこの世界を自分のものにしていきたい。

もう俺に畏怖を抱かれるものなどいるはずがない。

全てはこの一万円札ミツマタが全てを万事解決してくれる。

俺がこの世界で世界最強！そうであるはずだった。

そう、はずだったのだった。

「お、お前は桜柳咲蘭なのか!？」

眼前に立つ友人。中学と高校と同じ学校だった俺の数少ない友人。坂城琢真という友人に出会った。(さっきまで寝台列車に乗っていた人)

「ああ」

坂城のその瞳から俺のことを懐かしい人を見るような目をしながら言った。

「どうしてお前がこんなところにいる理由は何だよ？」

俺は今の状況がどのような状況なのか理解することができずに飲み込めなかった。

「お前この世界が何者かによって作られたかをご存知ですか？」

「は？」

俺は奴の言っていることが理解できないので、何とか理解しようと頭を回転させるので、それでもやはり理解できなかった。俺はそれしか答えることができなかった。

「ご主人様、どなたですかこの方は」

ルームは不安げな声帯を震わせて言った。

「ご主人様、この方はご主人様を惑わせる敵の味方でしょうか」

炭素が含まれない無機質な声でロイドが言った。

「こいつは俺の友人であつたんだよ」

「ああ、あの時間は娯楽のような楽しさだった。記憶がおかしくなったので、頭から重要な記憶が消失して消えているので、俺がこれから教えようとしている」

「おつ、俺が記憶を失っているだと。ミツマタを持つ俺が記憶を忘れるわけがない」

怒髪天になりそうな思いを隠そうとしないでいらだって、重要なことを話さない坂城

の態度に苛立ちを隠せずいた。

「ご主人様はこの異世界を創設させた創設者にして生みの親であります。ただ、様々な外的要因の艱難辛苦があつてご主人様がこちらの世界に転移する際に記憶を真っ白な原稿のようにクリーンにしてフラットにさせていただきました。」

それはペンシルの声であつた。

「ペンシルお前」

「どういふことだ？ そう言おうとしたのだが、

「桜柳くんは私の思いなんて全く理解していなかった！」

それはいつもとは違かつた。いつものようなメイド口調ではなくなつたペンシルの罵詈雑言のような驚嘆な嘆き声であつた。こういつもと違う声は私の脳を混乱させ理解するのに苦しみを覚えさせようとした。

「おい、ペンシル！ お前はまさか？ 中学の頃LINEグループで一一緒に小説を共に創造し執筆していた、雪ヶ峰だったのか？」

「記憶が忘却しないで済んだんだね。あたしは桜柳咲蘭くんともっと話したかつたの。中学の時はまるで花びらがひらひらと舞っているようだった。みんなで小説を書いて批評しあつてお互いの向上心を遥かなる高めに向けてお互いを競い合つていく。こんな心が踊り狂うような楽しい集団はたとえ雲の中や五里霧中を探してもここしかない



んだって思ってたの。中学2年生のあの時間帯が永久に永続的にあったらいいなっておもったの。でも時間という名の運命はそれを許容しなかった。受験勉強が始まってあのグループ内での競い合いはいつの間にか荒廃していった。受験勉強が終わった後、それぞれの進学先に進学したかと思えばもうあの集団の会話は皆無に衰退していった。私はそんな状況が寂しくて、寂寞間に包まれて、孤独感にさいなまれていたの。もう一度あのグループでの楽しい時間の想像を再現したいと思ったの。それができなければ、せめて大好きな桜柳くんにもう一度会いたかった。だからこの世界を創造したの」

すると黒髪でメイド服姿だったペンシルから光が放たれ、止まることのない光の粒は乱反射し、以前見たことがある銀髪の少女に変わった。

「そんな、だったら実際に会いに来てくれればよかっただろうに。どうしてそうしなかったんだ？」

「それはできなかった。私は高校に入学してすぐ親の都合で急に海外に行くことになって。それである日私はふと異世界を作り上げる能力を得たの。信じてもらえないかもしれないけど信じてほしい。それがこの世界がこうして存在する理由だから」

「なるほど」

あまり腑に落ちないのであるが確かに実際にこうしてこの世界が作られているのであるのだからそうなのであろう。

そう自分で納得していたのだが、今まで口を閉ざしていた坂城が口を開いた

「おれと、おまえと、ルー・ベルファ。あと雪ヶ峰。この四人のメンバーで小説を書いていたんだったな」

「ああ」

あのグループでの時間は俺にだって楽しかった。でももう一度あのグループで発言しようと思ったがなぜだか何を言えればいいのかがわからなかった。なので発言しなかった。

「たださあ、雪ヶ峰。僕の後輩の霧ヶ峰と君とはどういうつながりがあるんだ？」

霧ヶ峰はニヤリと笑った。そして雪ヶ峰が、

「じゃあ一つ質問するけど、霧ヶ峰さんとの思い出ってどんなのがある？」

「そりゃあもちろん、文芸部の後輩としてずっと……あれ、おかしいなそれ以上の記憶が」

坂城は霧ヶ峰を思い出そうとしたのであったが思い出すことは不可避であった。

「霧ヶ峰さんは坂城くんをこの世界に連れて行くために作ったアンドロイド。いわゆる機械ね。より簡潔にこの世界に連れて行くために坂城くんの記憶を少し変えさせたの」

「そうだったのか」

「いや、さすがにバレるかなって思ったんですけど以外とバレないもんですね。先輩の

そういうところ嫌いじゃないですよ」

霧ヶ峰は悪戯な笑みを彷彿させ、こう言ったのであった。やれやれ、すっかり騙されてしまった。

まるで猫をかぶっているようだ。

「さすがは、ペンシル。いいや、雪が峰。記憶処理を持つ処理能力の力の持ち主だけあるね」

ルーム「よく覚えていましたね。さすがはご主人様です。私は忘れかけていましたよ」

「私が記憶操作を二度目をしかなかったからそれも仕方ないね。ルーム」  
一呼吸をし、深呼吸を置いたのち、雪ヶ峰（ペンシル）は話を続けた。

「この世界には楽しい楽しさがいっぱいあるの。悪の王様の一族がこの世界を支配していてそいつを倒して我々共々王様になることもできるし、一万円札の原材料として幅広く見識が伝聞されているミツマタでどんなものだって有象無象として作れる。私はこの世界でみんなと冒険をし旅してみたいの。唐突にここの世界に騙し討ちする形式で連れて行ってしまったのは大いに申し訳なく思ってる。でも、でも、みんなならきつとこの世界で楽しんでくれると思って」

「ああ。僕もそうしたいよ。君と、ルームとロイドともつとこの世界で楽しみたい。ど

うだ？坂城は」

「そうだね。この世界は前世の世界線の世界よりも面白いかもしれない」

「ここから始めましょう！私たちの異世界冒険を！」

雪ヶ峰は空を背に受けながら高らかな声でこう言つて、ルーム、ロイド、坂城、霧ヶ峰、桜柳、雪ヶ峰、あと復元した修復世界のルーフ・ベルファの異世界の冒険の始まりが始まることになった。

そして、彼らの楽しい日々は永遠に続くのであつた。

「いや、まして」

ペンシルによる記憶操作に対する解毒剤を服用し記憶処理が解かれた桜柳は脳裏の

表側の一角にふと思い出したことがあった。

「雪ヶ峰よ、この世界の生みの親は俺だつて言つたよね。そういえば」

「そうでしたね。はい。この世界の生みの親は桜柳くんであちがいないですよ」

「このミツマタで異世界無双する展開も、メイドハーレムする展開も、あのとときのLINEグループに投稿した話の内容じゃないかよ！」

「はい。その通りです」

雪ヶ峰は当然でしよと言わんばかりの表情で言つた。

これ以上は黒歴史なので、これ以上話してほしくなかつたので霧ヶ峰の口をふさいだ。

「まあ、それは昔の思い出だな」

「さすがはご主人様です！常に過去に目を背けた未来志向なんですな」

雪ヶ峰はペンシルのような口調を変えて言つた。

「なんだか今まで君がその口調で話してたと考えると考えるものがあるねえ」

「ペンシルも私も同じ思慮と思考を兼ね備えを持った「私」が考えたことだわ」

「えっ？」

雪ヶ峰は桜柳の頬に口づけをつけた。それは人が持つ適温な体温出会つた。

「本当に本当の私、正真正銘の雪ヶ峰からのファーストキスですよ」

目の前がまるで新品のキャンパスのように純白になっていた、そのとき、

「ご、ご主人様まあん。わ、私のことも捨てないでくださいいね」

「わっ、私のことも……」

ロイドとルームは不安げな表情をしながら両腕に抱き着いてきた。

「ああ、もちろん。ここから異世界冒険を始めよう！」